

1. 岩木川流域の自然

1. 岩木川流域の自然

1 流域の概要

“津軽”と言えば本州北端の地で、雪と、リンゴの産地というのが一般的な印象です。

中央から遠く農業以外にこれといった産業のないこの地方は、あらゆる面で発達が遅れていました。それだけに、俗化に染まらず、都市圏には見られない自然がまだ多く残されています。

寒くて長い冬が終わり4月中旬になると春めき、野山の木や草が新芽をふきはじめる頃には、野生動物たちの活動もはじまります。

下旬になると桜・ウメ・モモなどの花が一斉に咲き、田植の頃には、リンゴの花盛りとなります。しかし、この頃から6月いっぱいにはヤマセが吹き続き暖房を必要とする日もあります。やがて暑い夏に入るとネプタ囃子が聞こえ、津軽一帯は夏祭りをはじめます。集中豪雨による洪水が発生するのはこの時期です。

8月も終わりに近づくと秋風が立ちはじめ、9月下旬からは農作物の収穫期となります。10月中旬頃になると山々は一斉に色づきすばらしい自然の美を見せてくれます。11月に入ると平野部にも降雪がみられ、やがて津軽平野は白一色になるのです。

岩木川流域は、青森県の西半分を占める津軽地方の中央に広がっています。流域の中心を流れる岩木川は、その源を青森・秋田両県境の白神山地にある雁森岳付近に発して、途中の諸支川を集めながら、岩木山(1625m)の南東山麓を東に流れ、弘前市付近で流れを北に変えて同市下流で、平川を合流します。五所川原市付近に至って十川等の支川を合流し、平坦な低地をゆったりと北上しながら十三湖水戸口を経て日本海に注いでいます。

幹川流路延長102km、流域面積は2,540km²で、津軽平野の全域を占めています。全国的にみて幹川流路延長で75位、流域面積では24位となっていますが、青森県内では最大の河川です。

流域の形状は、それぞれほぼ同程度の流域をもつ岩木川、平川、浅瀬石川の三川合流点より上流域が、全体流域面積の約半分を占め、その形状も扇型に広がっており、下流域は比較的細長い流域形状となっています。また、三川合流地点は、河川勾配の変化点で、上流部は1/280~1/700と急で、洪水流出が短時間に集中しやすく、これより下流五所川原までは1/700~1/4,100、下流部は1/4,100~1/5,800と緩くなっています。このような地形的条件のため古くから水害が多く発生していました。

この流域は、津軽山地、奥羽山脈、白神山地、岩木山等に囲まれた地域で、森林、水田、樹園地(リンゴ)がその大部分となっています。

流域におけるリンゴの主産地は、上、中流部の弘前市、黒石市、浪岡町などを中心とした地域となっています。



岩木川源流部 白神山地



岩木山とリンゴ園



岩木川下流部の水田

リンゴ栽培技術は明治8年に導入されたものですが、当時はいろいろな障害がありました。現在では、剪定、薬剤散布、袋かけなど技術の向上と気象条件に合っていることから生産額は全国の約50%を占めるに至っています。

水田は主に低地、湿地帯など下流部に多く、五所川原下流部にあつては津軽藩の新田開発によって拓かれた地域であるが排水が悪く、以前は腰切り田、乳切り田と言って腰まで泥に埋まる水田や胸までも泥に埋まる水田も少くありませんでした。現在のように農作業の機械化の進んでいない時代には、主に馬によって耕作されたものですが、流域下流部では泥に埋まるため馬などが水田に入ることが出来ず、もっぱら人力によって、しかも下駄とか大足とかといわれる大きな木杵を足につけたり、長い板などを渡しての農作業すら行われた経緯があります。

戦後岩木川流末処理事業、十三湖の圍繞堤の完成と相俟つて十三湖干拓事業も行われるなど、治水、利水の機能が整つて、今は全くその面影をとどめない水田地帯となっています。

集落、市街地は、台地、扇状地、自然堤防等の比較的水害の受けにくい所に立地していますが、近年は低地への進出も見られるようになりました。また、津軽平野を潤す岩木川は「津軽の母」として灌漑用水だけでなく、発電、上水道等平野一帯の水源として広く利用されています。

山地面積が約70%を占めているこの流域は、天然林のすぐれた地域も残つていて、自然景観の美しさに恵まれ、北西部の十三湖、屏風山を含む津軽国定公園をはじめ、岩木山を中心とした地域及び赤石溪流暗門の滝、大鰐碓ヶ関温泉郷、黒石温泉郷、芦野池沼群等県立自然公園などが四季を通じての観光地としても知られています。



目屋溪



黒石温泉郷

2 地形と地質・気象

1) 地形

岩木川流域は、中央部を三角州性・扇状地性低地からなる県内最大の津軽平野が占め、台地がそれを囲み、さらに丘陵地・山地が続いています。

北部に位置する津軽山地は、津軽半島の骨格をなす山地で、北北西から南南東に走り、大倉岳（標高677m）、四ツ滝山（標高670m）、馬ノ神山（標高549m）等の山々によって高所が形成され、津軽平野を偏東風（通称ヤマセ）から守る形になっています。（図1-1）

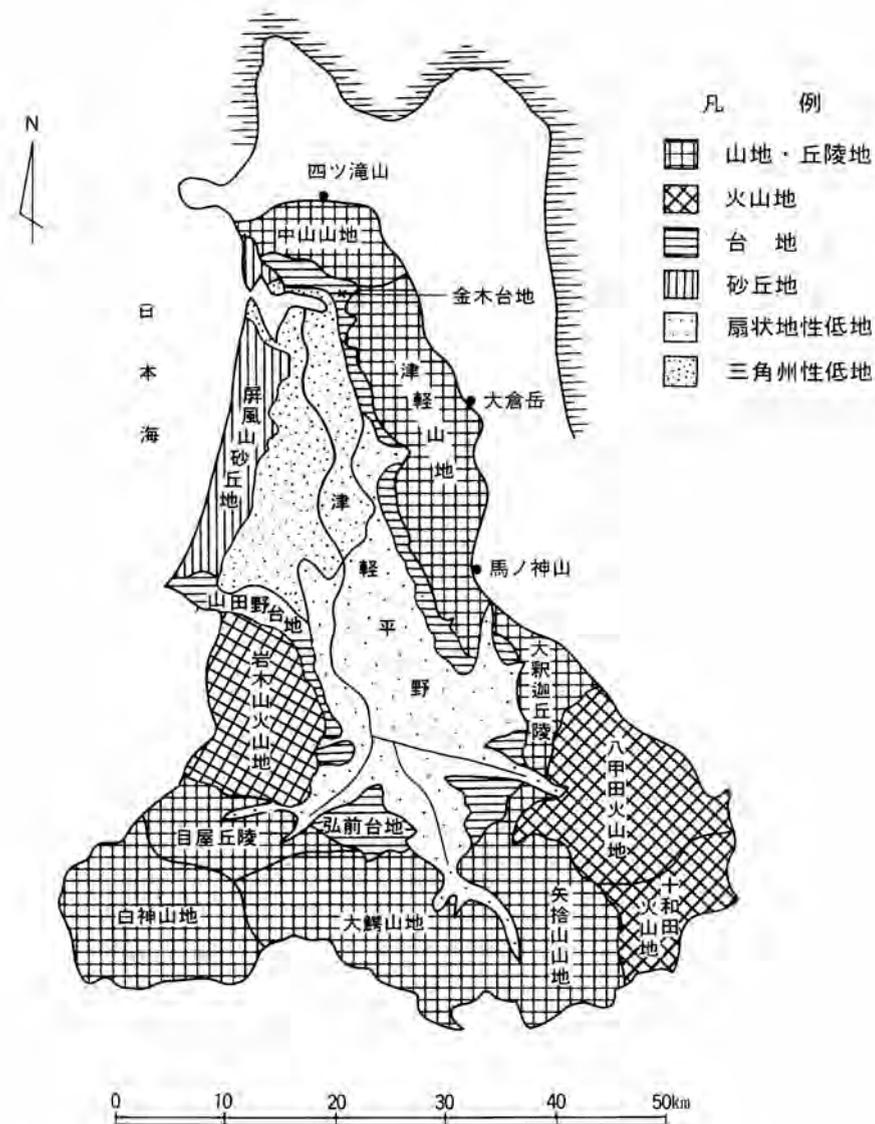


図1-1 岩木川地性概略図

また、平野の北西側には丘陵性の屏風山（標高30～80m）が南北に延び、砂丘地帯を形成しています。この砂丘は全国的に珍しい大型の縦列砂丘や風上に口を開いたU字型の砂丘が発達しています。

平野の南西側には岩木山火山地があり、溶岩流と碎せつ物が交互に重なってできています。岩木山は、二重式火山で外形がコニーデ型であることから一般に津軽富士とよばれ、冬季、日本海から吹きつける季節風をさえぎる形になっています。その南方には新第三紀の造山運動によって隆起した白神山地（標高500～1,000m）があります。この山地に岩木川の源流があります。（図1-2）

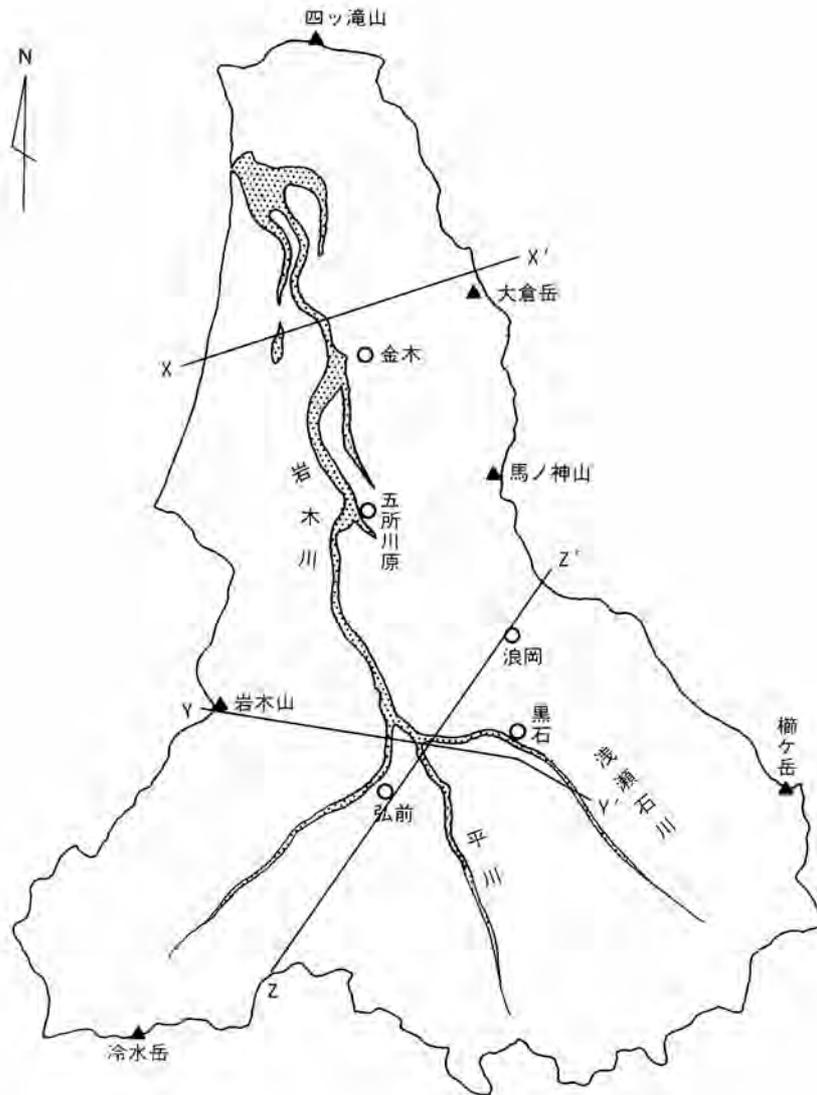


図1-2 地形断面位置図

東側の浅瀬石川上流には、傾斜が緩やかな奥羽山脈が連なっています。奥羽山脈は、中新世から鮮新世にかけての激しい造山運動によって生じた背梁山地です。この山地に平川・浅瀬石川の源流があります。

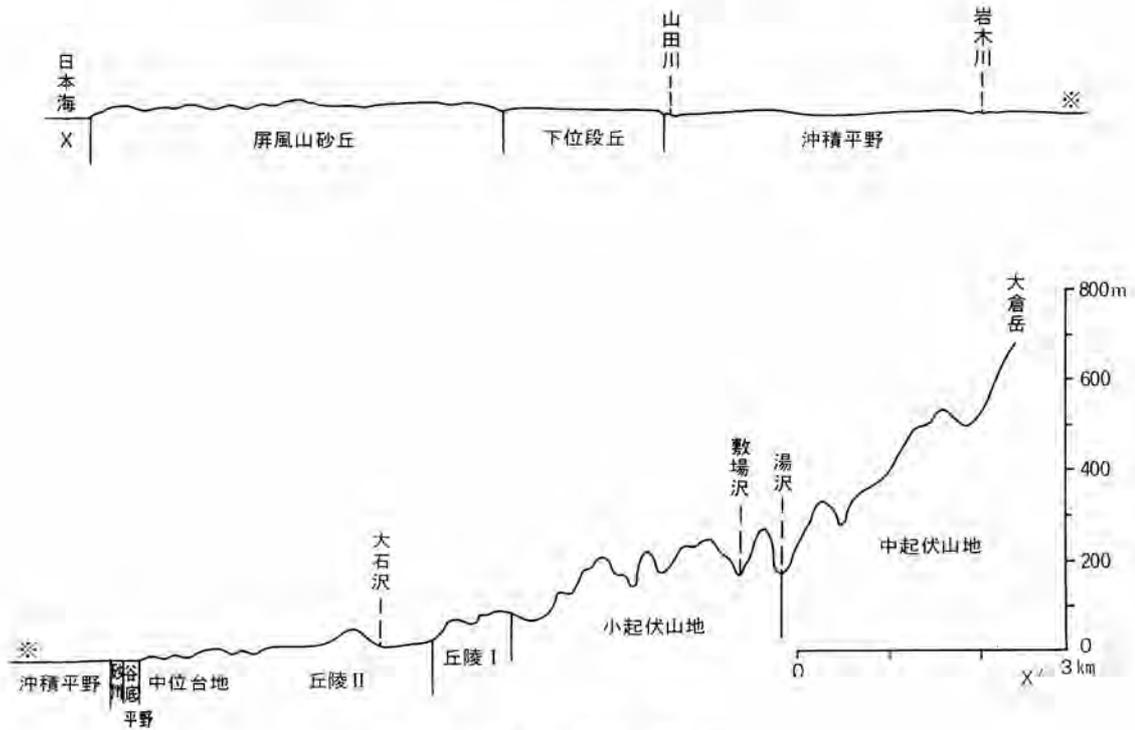


図1-3 地形断面図 X-X'

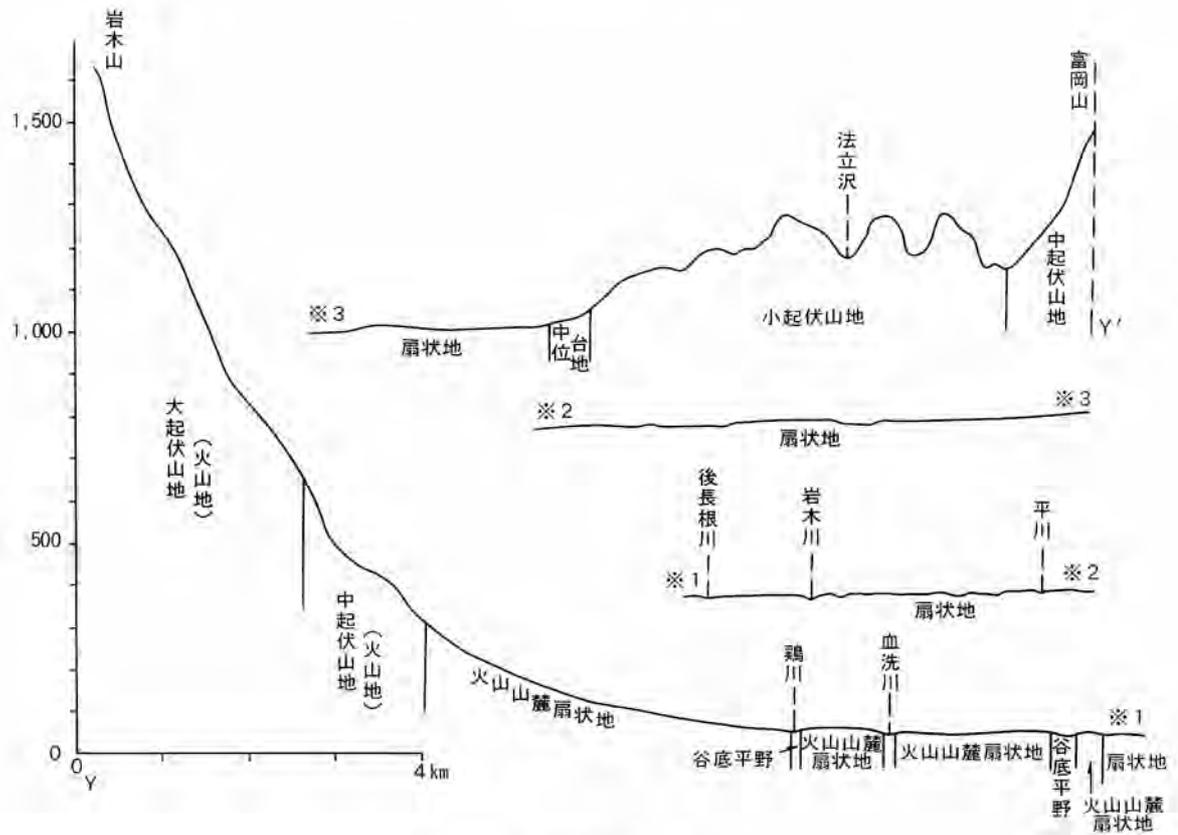


図1-4 地形断面図 Y-Y'

津軽平野は、県内最大の平野で、東から南にかけて山地をめぐらした南北に長い盆地状の平野です。また、岩木川の本・支流によって涵養される海拔20m以下の低平な沖積平野で、五所川原以北は海拔5m以下の低湿地が大部分を占めています。しかし、平野の南端には扇状地が並び、北部の低湿地とは著しい対照を示しています。また、中央を北流する岩木川沿いにはかなり明瞭な自然堤防の地形が見られ、岩木川が流路を変えながら扇状地を広げてきた経緯が見受けられます。(図1-5)

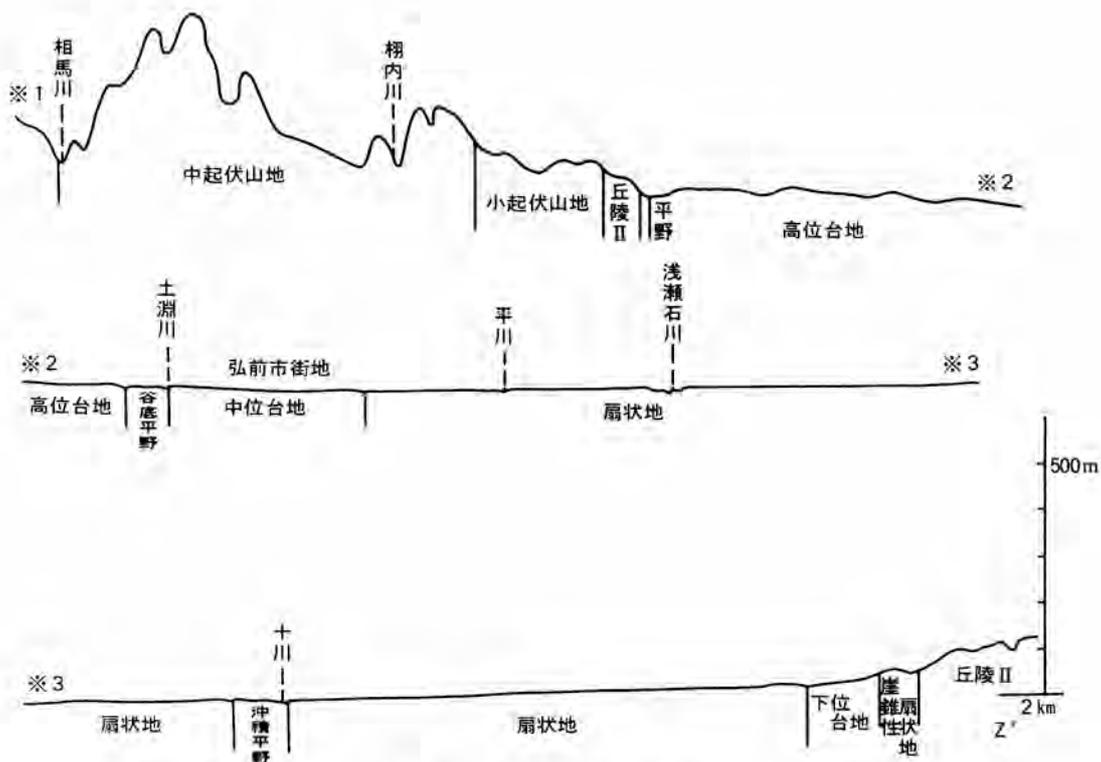
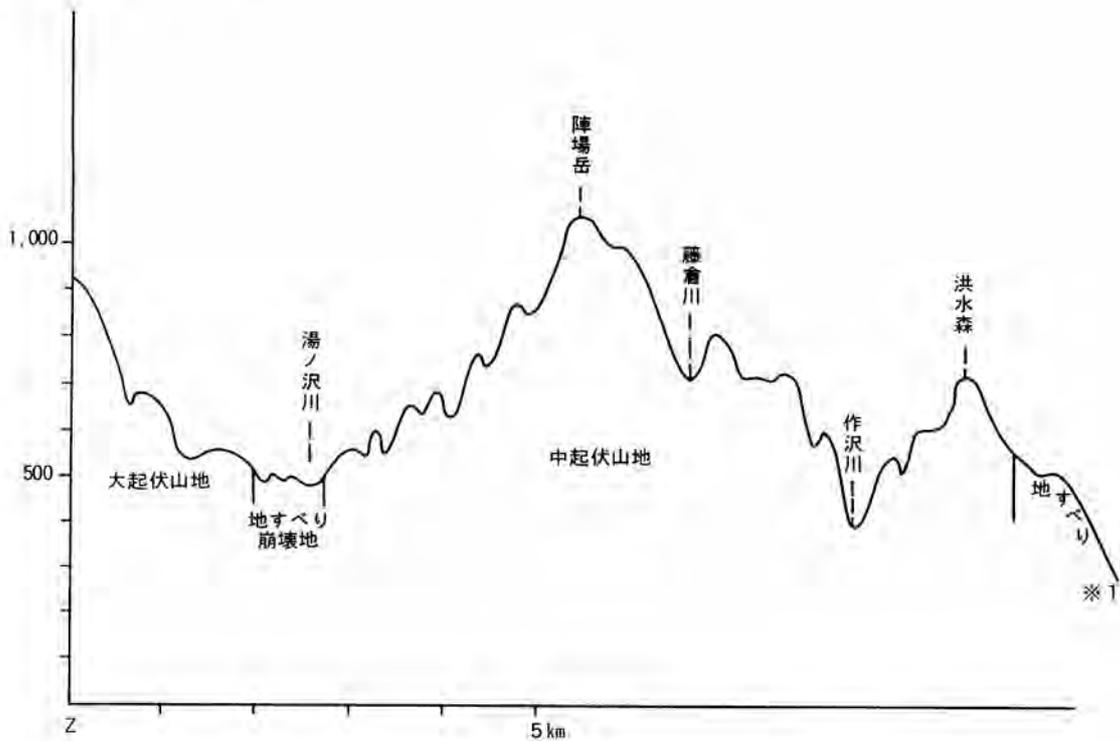


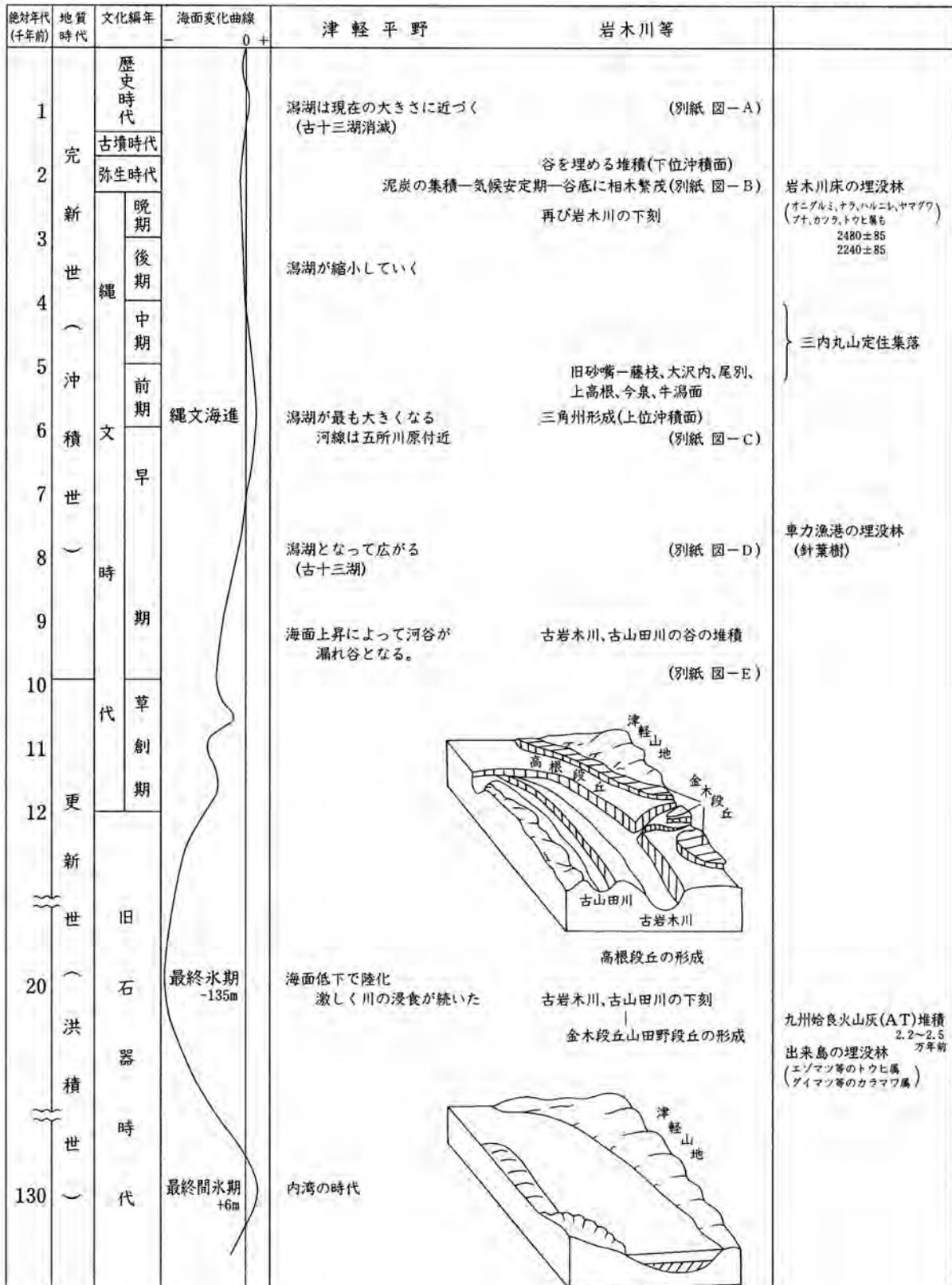
図1-5 地形断面図 Z-Z'

※津軽平野の地形発達

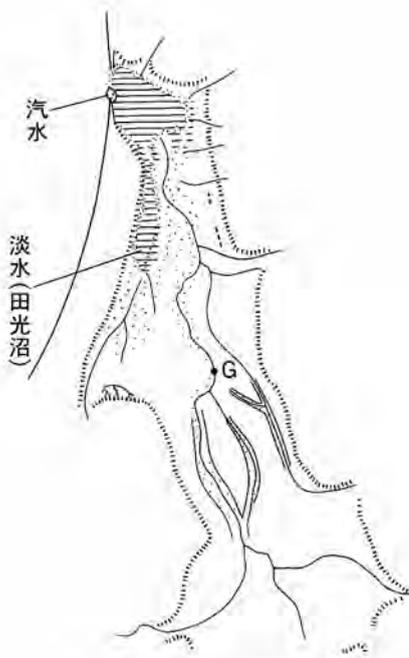
津軽平野を流れる岩木川の原型が出来上がるのは、約1000年前のようです。よく大昔この十三湖は、五所川原のあたりまで広がったという事が言われていますが、その発達の様子は次のようになっていたようです。

表 1-1 津軽平野の地形発達史

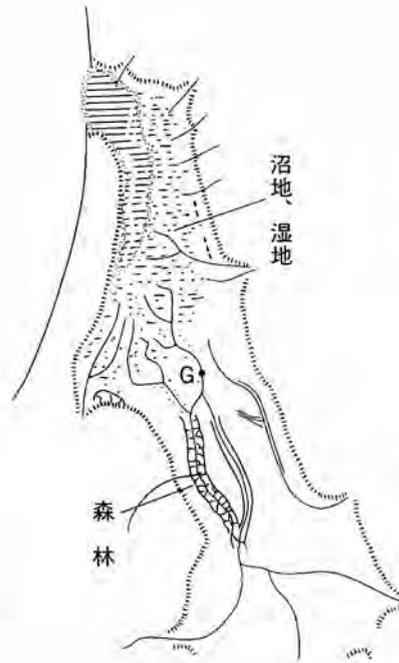
主として 海津正倫(1976)による



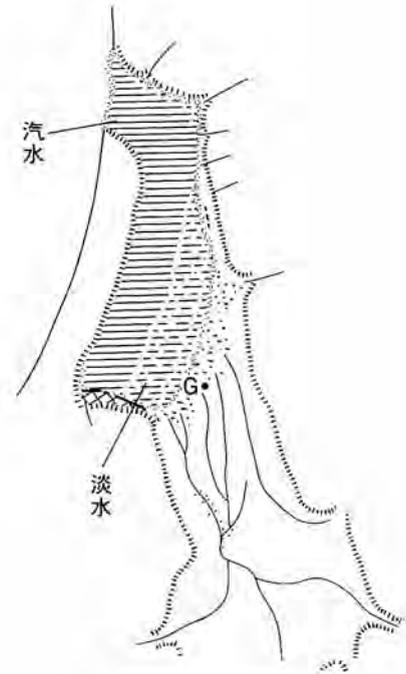
別紙



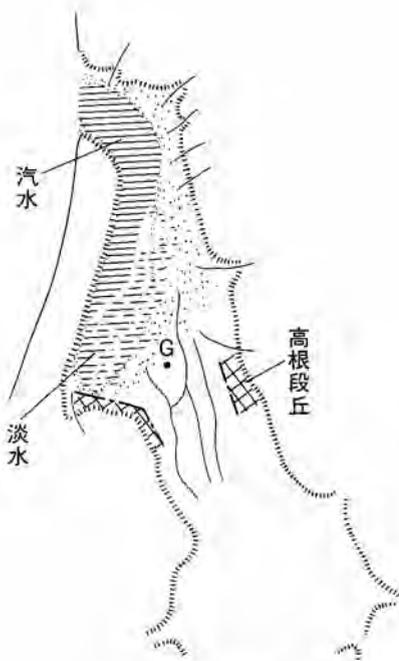
図一A 1000年前



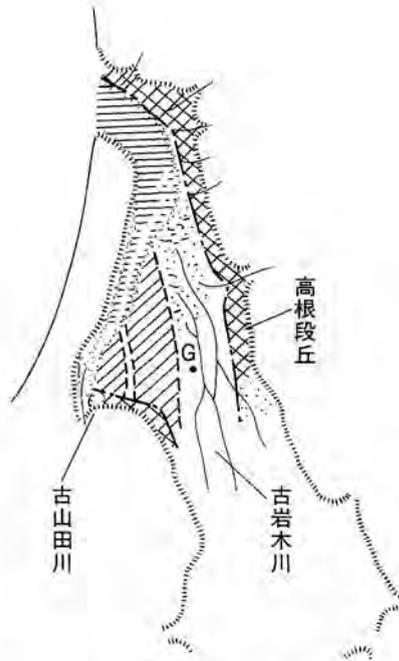
図一B 2500年前



図一C 6000年前



図一D 7000年前



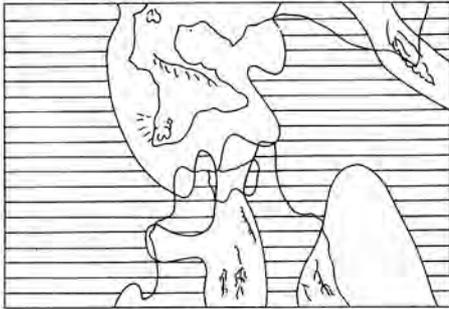
図一E 9000年前

G. 五所川原の位置

それでは日本列島の生いたちがどのようになっていたかを下図で紹介します。

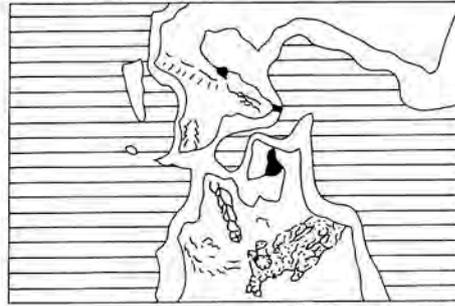
第三紀以降の低地帯形成概念図

1. 新第三紀・鮮新世



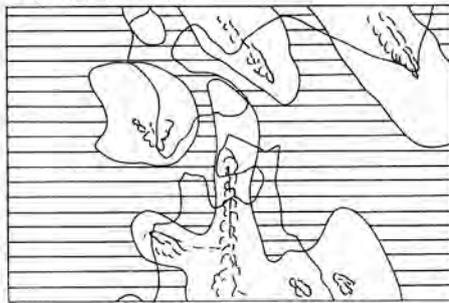
500万年～300万年前

5. 第四紀・更新世後期



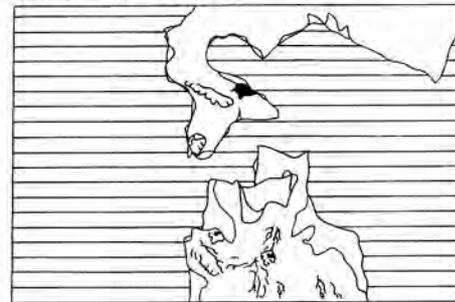
15万年～1万年前

2. 鮮新世～更新世



300万年～200万年前

6. 第四紀・完新世



1万年前～現代

3. 第四紀・更新世前期



200万年～80万年前

7. 現在



現在

4. 第四紀・更新世中期



80万年～15万年前

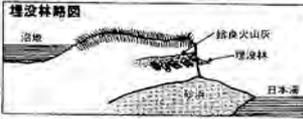


『日本列島のおいたち』築地書館を参照として作図した。

2万5000年前の埋没林見つかる



木造町の出来島海岸で発見された森林氷期の世界最大規模の埋没林(がけの中央部分)



木造・出来島海岸で世界最大級 氷期の手掛かりに

本報記者 木造町にある約二万五千年前の埋没林が世界最大級の埋没林であることが十四日(十四日)分かった。埋没した樹木を詳しく観察すると、その当時の森林環境や大気の様子などが明らかになり、貴重な手がかりが得られる。

埋没林がどこにあったのか。本報記者が木造町(のり)の埋没林跡を訪ねて、約二万五千年前の埋没林跡を調査した。埋没林跡は、埋没火山灰の下に埋没した樹木の根や幹が露出している。埋没林跡は、埋没火山灰の下に埋没した樹木の根や幹が露出している。埋没林跡は、埋没火山灰の下に埋没した樹木の根や幹が露出している。埋没林跡は、埋没火山灰の下に埋没した樹木の根や幹が露出している。

埋没林跡は、埋没火山灰の下に埋没した樹木の根や幹が露出している。埋没林跡は、埋没火山灰の下に埋没した樹木の根や幹が露出している。埋没林跡は、埋没火山灰の下に埋没した樹木の根や幹が露出している。埋没林跡は、埋没火山灰の下に埋没した樹木の根や幹が露出している。



日本海に面する七里長浜の海岸。埋没林跡が点在している。

七里長浜 泥炭層に覆われ30メートル 古代埋没林の根出現

出来島より古い? 車力村が本格調査へ

車力村の日本海に面する七里長浜の海岸沿いに、約2万5,000年以上前のものと見られる埋没林の根の部分が出現し、本島のロマンをほうふつさせる。埋没林跡は、泥炭層に覆われており、砂が押し寄せると突然姿を見せるという埋没林の根の部分は約30メートルに及んでいる。

埋没林跡は、泥炭層の下に埋没した樹木の根や幹が露出している。埋没林跡は、泥炭層の下に埋没した樹木の根や幹が露出している。埋没林跡は、泥炭層の下に埋没した樹木の根や幹が露出している。埋没林跡は、泥炭層の下に埋没した樹木の根や幹が露出している。

埋没林跡は、泥炭層の下に埋没した樹木の根や幹が露出している。埋没林跡は、泥炭層の下に埋没した樹木の根や幹が露出している。埋没林跡は、泥炭層の下に埋没した樹木の根や幹が露出している。埋没林跡は、泥炭層の下に埋没した樹木の根や幹が露出している。

2) 地質

この流域の地質は、山地部はおおむね綠色凝灰岩地帯に属し、新第三系の綠色凝灰岩（金属鉍床胚胎層）と泥岩（石油母層）とで特徴づけられます。

地域別による特性をみると、平川・浅瀬石川流域は、十和田・八甲田火山の噴出物地域があつて、特に浅瀬石川流域は火山系のシラス質土（軽石流堆積物）と安山岩溶岩で広く覆われています。このため、緩傾斜地に深く刻むV字谷が発達し、崩壊の起きやすい地質となっています。（図1-6）

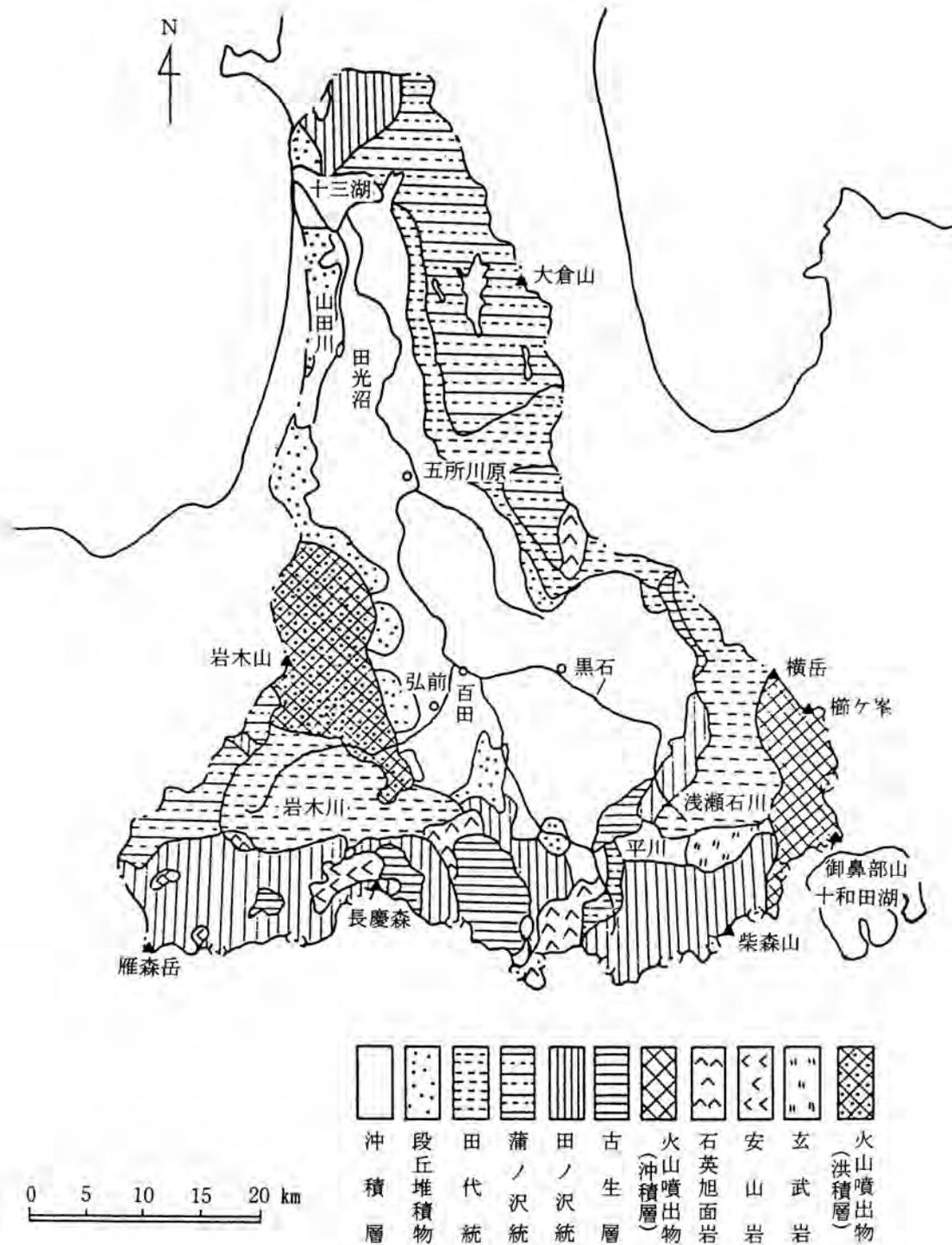


図1-6 岩木川流域地質概略図

一方、岩木山火山地は、中腹以上は溶岩が主体をなし、山腹に点在する爆裂火口や硫気孔が山体を刻む放射谷の谷頭となっています。山ろくは火山泥流と土石流堆積物で覆われており、過去の土石流の活発さを示しています。

南部の矢捨山山地は、大部分がシラスで広く覆われていますが、西部は緑色凝灰岩から成っています。また、大鱗・白神山地は、相当広く緑色凝灰岩が分布し、これらの緑色凝灰岩は、金属鉱床の成生熱や温泉活動の熱で粘土化し、地すべりなどを起こしやすい地質となっています。(図1-7)

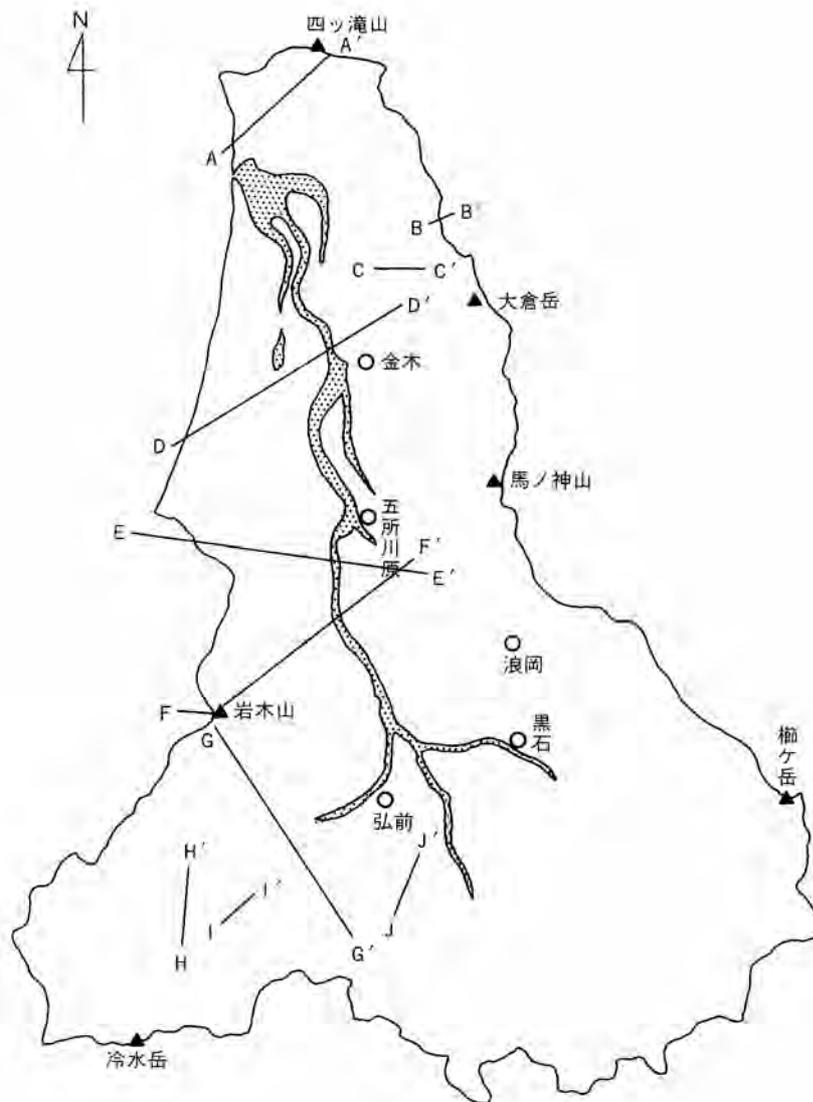


図1-7 地質断面位置図

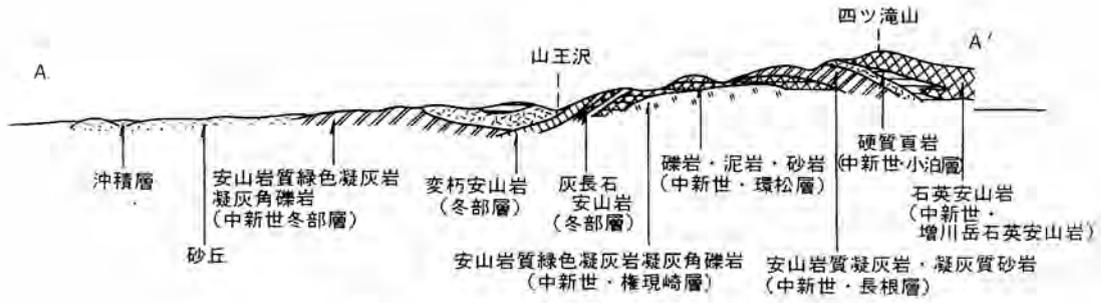


図1-8 主要地質断面 A-A'

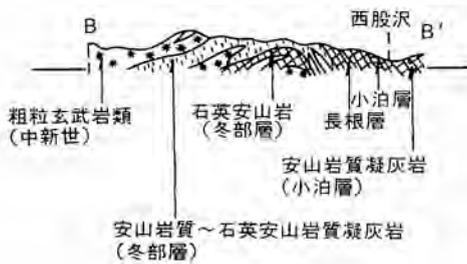


図1-9 主要地質断面 B-B'

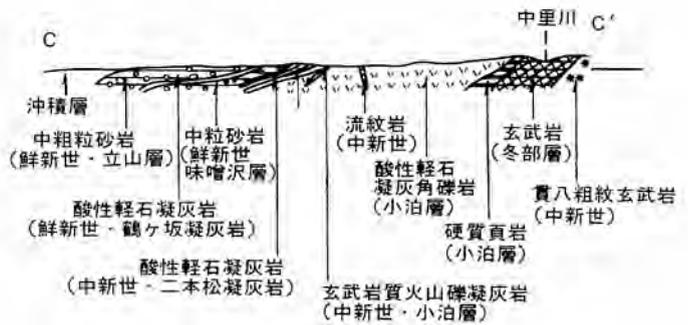


図1-10 主要地質断面 C-C'

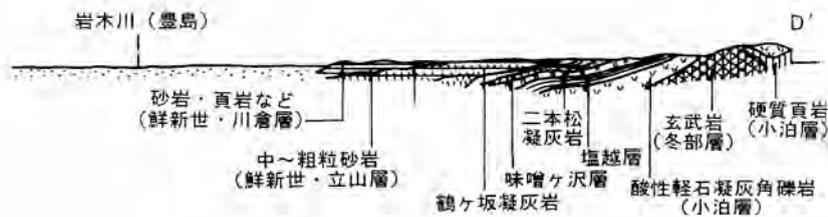
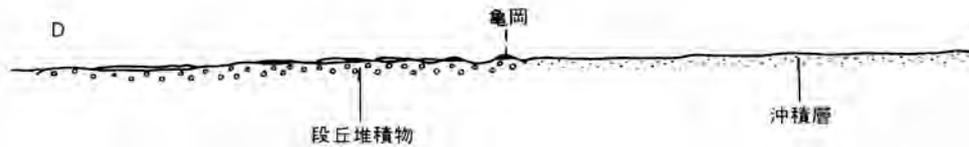


図1-11 主要地質断面 D-D'

北東部の津軽山地は、泥岩が主体で、袴腰ドーム及び馬ノ神ドームとよばれている二つの大きい背斜構造になっていて、かなり複雑な地質構造をなしています。

弘前・金木・山田野等の台地は、地質的にはあまり弱点はありませんが、大釈迦丘陵地は大部分がシラスで覆われ、西部は砂岩・砂質シルト岩が分布し、水を含むと軟弱化しやすくなります。

また、目屋丘陵地の北西部は、泥岩類から成っており、南部丘陵地の下にある綠色凝灰岩は風化が著しく、崩壊・地すべりの起こりやすい地帯です。

五所川原以北は、低平湿地の軟弱地盤帯が広く分布しており、かなり厚い泥炭層があります。北西部の日本海側には、砂丘砂や堆積物で覆われた屏風山砂丘地が南北に走っています。

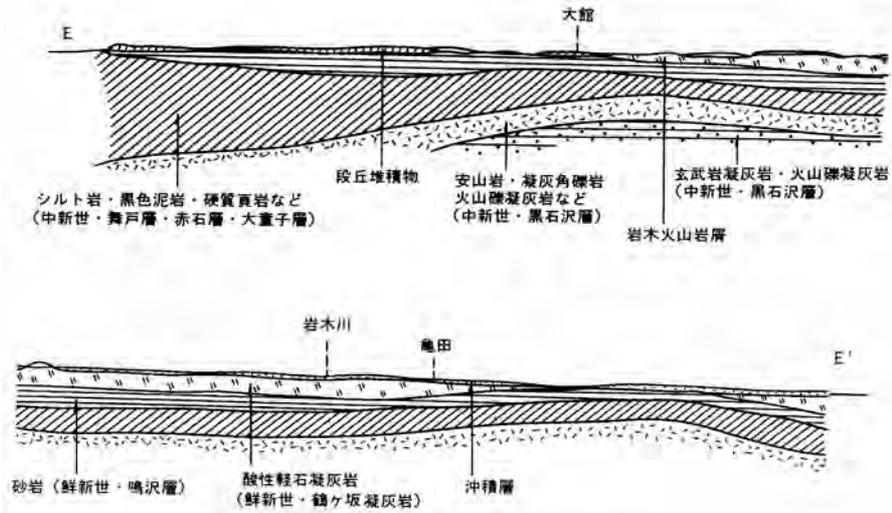


図 1-12 主要地質断面 E-E'

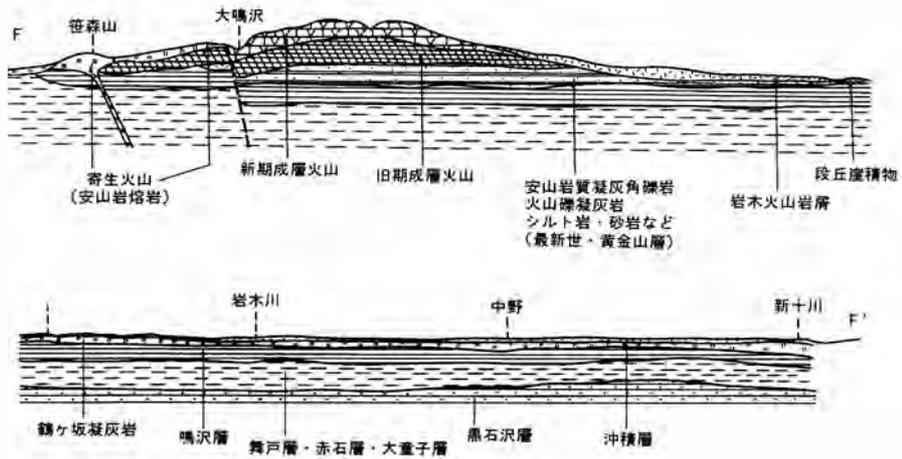


図 1-13 主要地質断面 F-F'

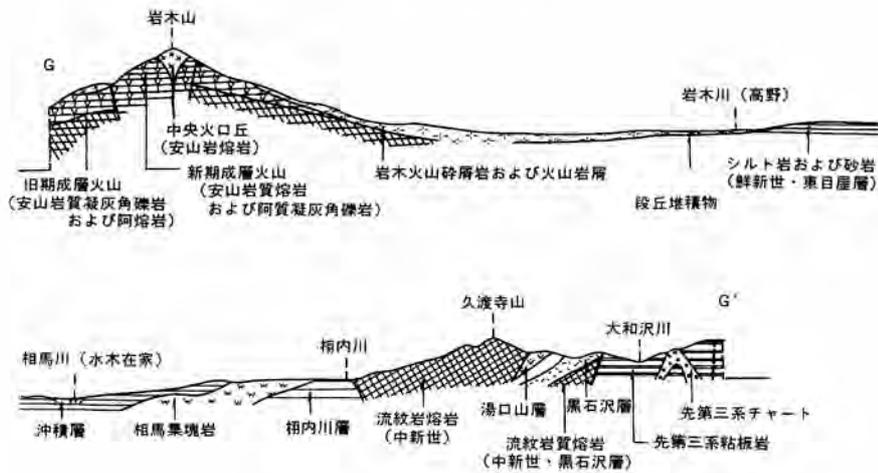


図 1-14 主要地質断面 G-G'

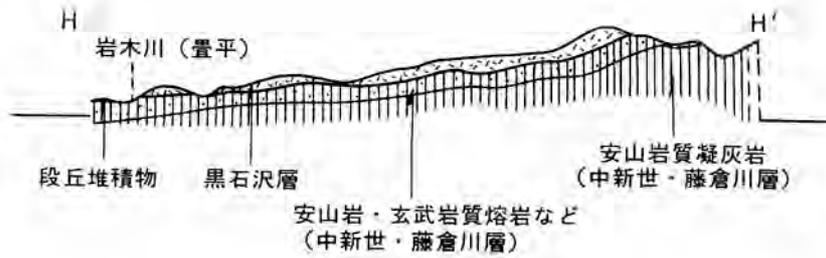


図1-15 主要地質断面 H-H'

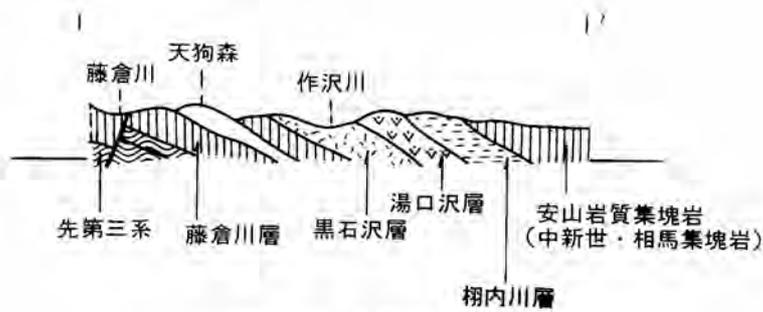


図1-16 主要地質断面 I-I'

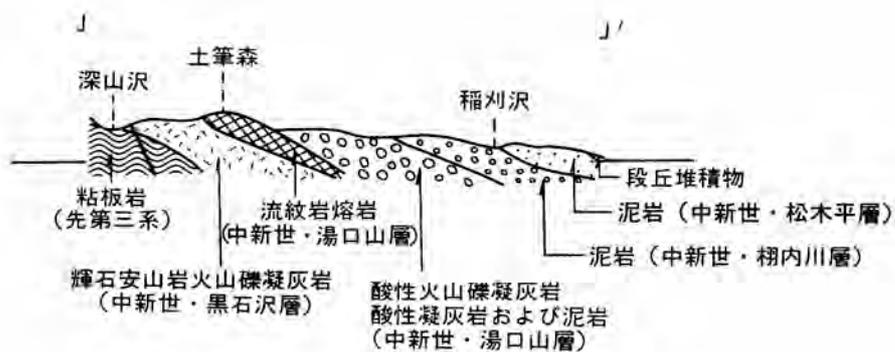


図1-17 主要地質断面 J-J'

全体をまとめると、山地部はおおむね新第三紀層で構成されており、中生層は白神山地にわずかに分布しているだけです。丘陵地は洪積層段丘堆積物で覆われ、平地は河川の堆積物及び砂礫粘土から成っています。

津軽平野は、岩木川によって造られた広大な沖積層です。

3) 気象

流域の気候は温帯冷涼型に属し、暑くて短い夏と低温で長い冬、希薄な梅雨型天候などを特徴としています。

梅雨期には、俗にいう「ヤマセ」（偏東風）が吹き続き気温が上らず、農作物に悪影響を及ぼすことがあります。過去には、この「ヤマセ」のため大凶作となったことがありました。

流域の平地部における昭和51年から昭和60年までの平均気温は、10°C前後で青森市とほぼ同じですが（図1-18）、近年（昭和61年から昭和63年まで）の各地で見ると、平均約9.5°Cと低くなっています。（表1-2）しかし、その年によって差はありますが、真夏日には36°C以上、真冬日には-11°C以下になることもあります。

また、真夏の月平均は22°C～25°C、真冬の月平均では-2.4°C～4.3°Cとなっています。

表1-2 各地の平均気温(°C)

地区 年	弘前	黒石	五所川原	市浦	青森
昭和61	9.1	8.9	9.2	9.4	9.3
62	9.8	9.8	9.9	9.9	9.9
63	9.4	9.1	9.4	9.5	9.4
平均	9.4	9.3	9.5	9.6	9.5

「県勢要覧青森県の姿」

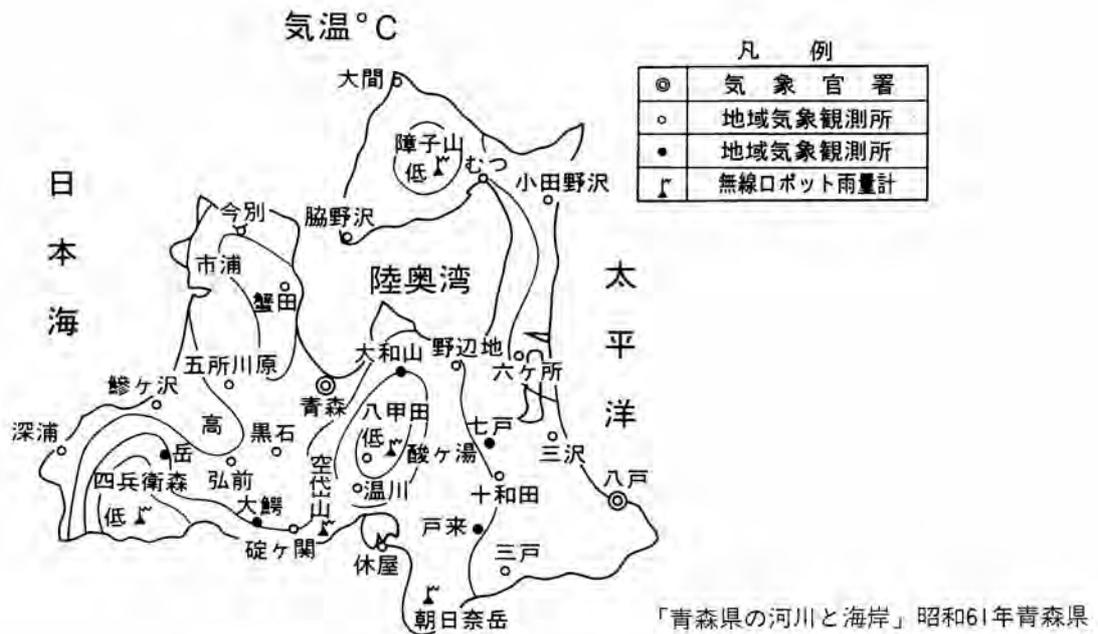


図1-18 青森県平均気温（昭和51年～60年）

流域の平均降水量は1,600mm程度で、全国のお他河川に比べて少ない地域となっています。南部の秋田県境付近では2,000mm～3,000mmと多く、しかも、局地性が強いので、過去に幾度となく大災害が引き起こされています。しかし、平野部では降水量が1,200～1,400mmと少なく、両者の差が極めて大きいという特性があります（図1-19）。

過去50年間（昭和3年～昭和52年）の長期観測資料から見ますと、多雨年と少雨年がそれぞれ連続して発生する傾向があります。

例えば、金木では昭和3年の883.5mmが最低で、昭和41年の2,142mmが最高ですが、その差は1,258.5mm、標準偏差278.9mmと相当大きい差を示す特性を持っています。

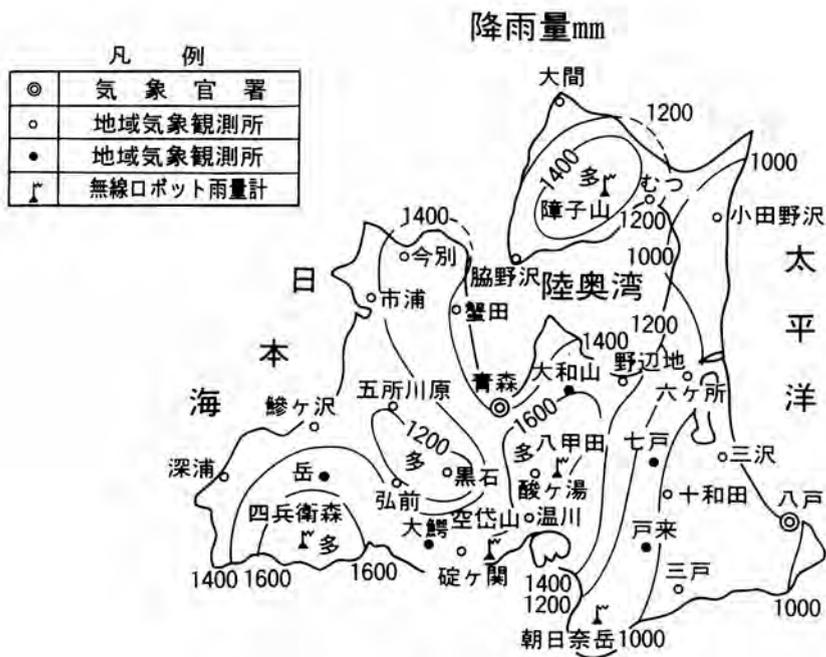


図1-19 青森県平均降水量分布図（昭和51年～61年）

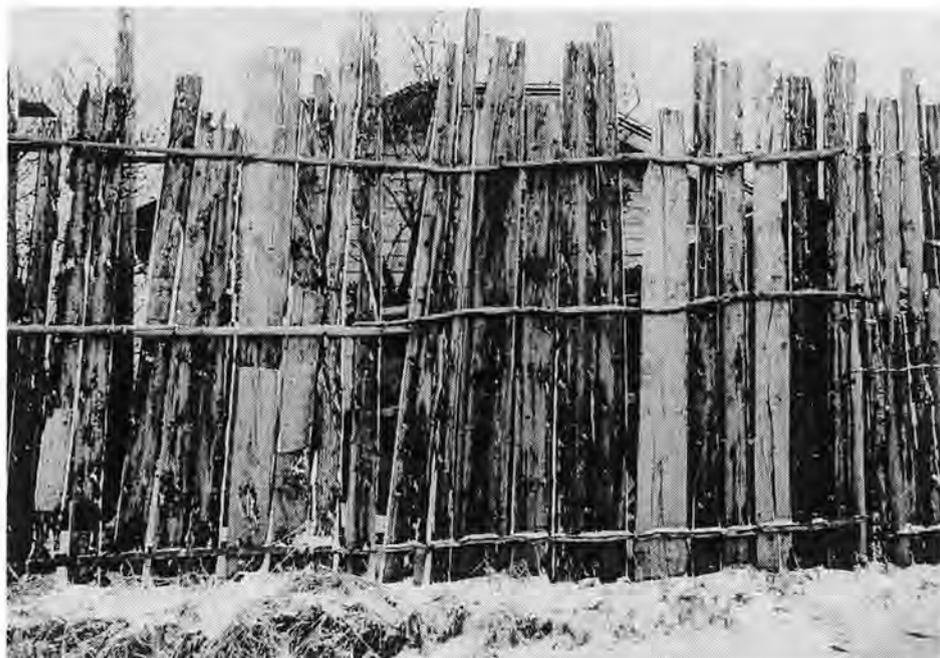
積雪は、岩木川上流や、浅瀬石川上流などの山地に多く、最深積雪が2 m以上に及ぶ多雪地帯となっています。しかし、岩木山東部にあたる弘前、黒石地区の平地は比較的少雪です（図1-20）。

また、北西部の日本海に面した車力、市浦などの地区で少ないのは、日本海からの強い風によって吹き飛ばされるためでしょう。

平野部の所々では、風の強い日には、しばしば地吹雪が発生し視界が遮られ、交通に支障が出ることもあります（図1-21）。

市浦村十三の、昔からいい伝えられている『十三の七不思議』の中に、「春になってもカッチョをとらぬ」というのがあります。これは、夏期の低温なヤマセや、冬期の強い北西風を防ぐため板などで家屋を防護しているもので、春になっても撤去せずにそのままにして置くということです。

また、ある年に十三湖突堤付近に設置してあった風速計の記録紙が全部真黒になって、それが2週間も続いていたことなどこの土地は気象のはげしいところです。

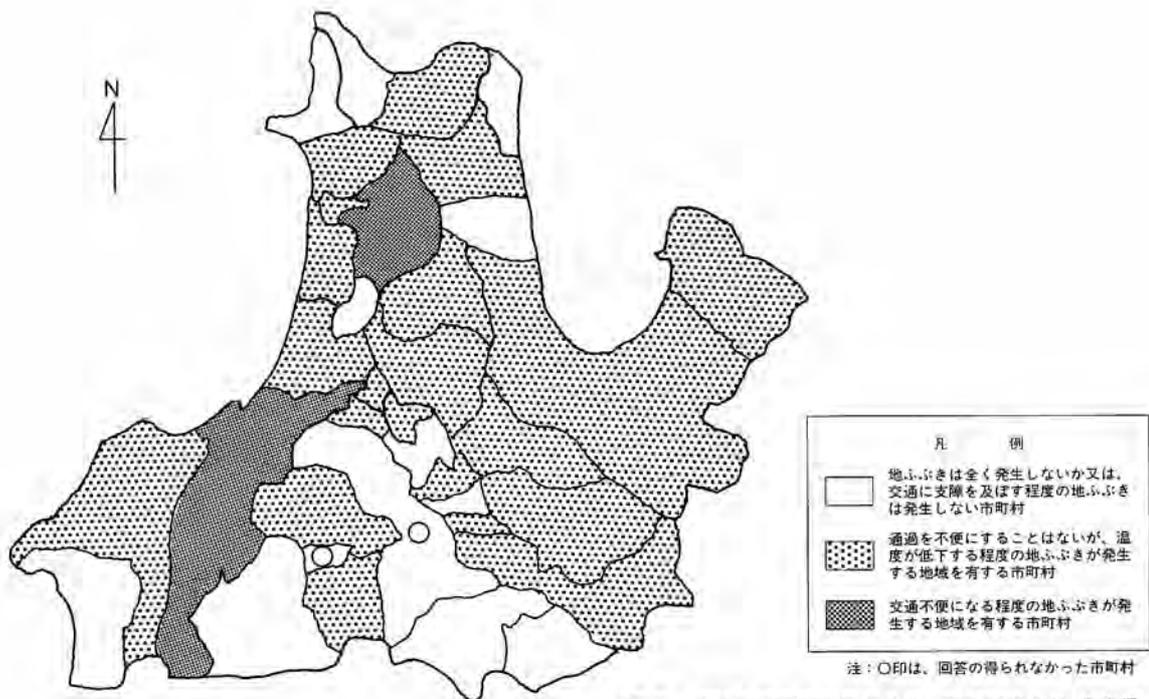


市浦村十三のカッチョ

注 昭和26年～昭和61年までの
最深積雪量を示す。
(単位：cm)
(一部地点は昭和52年まで)



図1-20 青森県内積雪一覧図



「青森・津軽地域環境利用ガイド」昭和60年3月 青森県

図1-21 地ふぶきの発生の有無及び地ふぶきの発生する地域を有する市町村分布図

春（3月～5月）

3月はまだ冬景色であります。日照時間も多くなり雪解けが始まります。しかし、下旬になっても気温が上がらず0℃以下になる日もあります。4月初旬はまだ雪の降る日もありますが、内陸部は次第に気温が上がり、下旬から桜が咲き始めます。5月は、平野一帯で田植えが始まり、夏の訪れを感じさせますが、所によっては晩霜があります。

夏（6月～8月）

6月半ばころには梅雨に入ります。五所川原から北は冷涼なヤマセが続き、気温の上昇がにぶることもあります。しかし、弘前を中心とした内陸部は、高温域となります。7月に入ると気温は20℃を越し、下旬から8月にかけては30℃を越す日も出てくるようになります。この時期は、前線の通過によって豪雨をもたらす、洪水が起こることが度々あります。

秋（9月～11月）

9月に入ると気温が下がり始め、内陸部でも高温が薄らいでいきます。また、台風季節で、地域的な洪水や強風によって大きな被害を受けることもあります。9月下旬からは稲刈りが始まり、10月に入ると、リンゴの収穫が本格的になります。10月中旬ころには高山では初雪の降る年もあります。11月中旬には、平野部でも初雪をみることもあり、津軽地方では次第に冬の姿を見せ始めます。

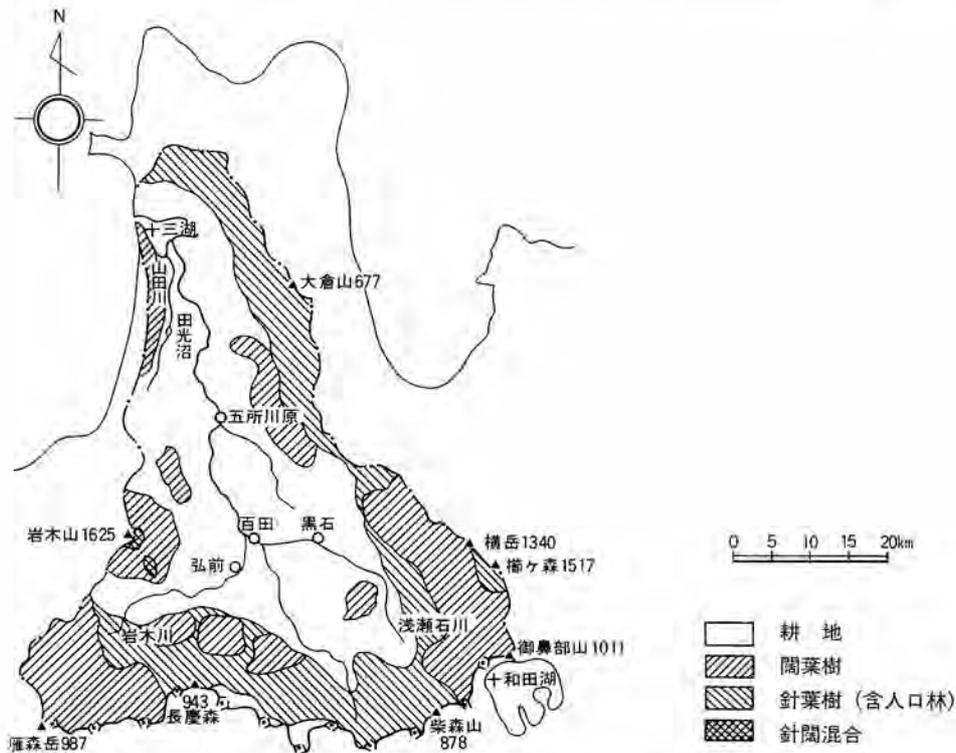
冬（12月～2月）

12月に入ると、大陸の高気圧の影響を受けてしばしば暴風雪となりますが、厳寒期は季節風の強い1月・2月で、連日曇天降雪が続きます。2月末ころになって、ようやく季節風が弱まり、気温も上昇して天気が良くなってきます。平野部全般に、1月～2月は0℃以下になる日が多く、地域によっては-10℃以下の日がしばしばあります。

3 林相と植生

1) 概況

流域を占める林野面積は、流域全体の約60%で、そのうち国有林と民有林面積の割合は2対1となっています(図1-23)。これらの森林の約40%は人工林でスギ・カラマツ・アカマツなどの針葉樹が多くを占めています。国有林では、ブナ、ナラなどの広葉樹の天然林が多く、ヒバ(ヒノキアスナロ)・スギなどの針葉樹がこれに次いでいます(図1-22)。



平成元年3月「岩木川水系河川環境管理基本計画」参考資料

図1-22 林相図

民有林は、国有林に囲まれた形になっていて、人工林ではほとんどが針葉樹で、天然林では広葉樹が多くを占めています。

全体的に見ると、上流域では山すそからカラマツなどの人工林、標高が高くなるにつれヒバ・ブナ・アオモリトドマツという順になって、ハイマツ帯へと移行していきます。

特に、上流域白神山地は青森県(西目屋村、鱒ヶ沢町、深浦町、岩崎村)と秋田県(藤里町、八森町、峰浜村、能代市)にまたがる130,000ヘクタールに及ぶ広大な山地帯です。このうち原生的なブナ林で占められている区域16,971ヘクタールが国際的評価を得、1993年12月に世界遺産として登録されました。

世界遺産とは、「世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約」で世界的に重要な文化、自然遺産を保護するためにユネスコ総会で採択されたものです。

白神山地の特徴は、人為の影響をほとんど受けていない原生的なブナ天然林が世界最大級の規模で分布していることにあります。そして、マタギに代表される山に生き、山に暮らす人々が大切に守り伝えてきた文化遺産的な地なのです。

また、このブナ天然林には多種多様な生物が生育し、ツキノワグマ、ニホンザル、クマゲラ、イヌワシ等をはじめ非常に多くの動物が生息し、白神山地全体が森林博物館的景観をしております。

ブナ林は、他の森林に比較して生命を育む力が並外れているとともに、水源かん養や洪水抑制、地表の浸食を防止する機能など県土の保全等に大きな役割を果たし、近年日本でも高く評価されています。

また、ブナ地帯に分布する針葉樹は、ヒバ・キタゴヨウ・クロベ(ネズコ)・コメツガなどがあります。

中流域では、スギ・カラマツの人工林とスギ・ヒバ・ナラを主とした天然林とが混生しています。

下流域では、スギ・マツ類の人工林やナラなど広葉樹を主とした天然林が混生しています。

屏風山地区に発達している海岸砂丘は、藩政時代から植林されたクロマツがほとんどですが、近年この地区では、開畑が進められ給水設備のある農業が行われています。砂丘の背後には湿原や沼地が形成されており、湿原植物の群落が見られます。特に、ノハナショウブ群落やニッコウキスゲ群落は有名です。海浜には、ハマニガナ・ハマニシク・コウボウムギを主とする海浜植物群落、次いでハマナス群落が帯状に広がっています。

流域には、次のような天然林のすぐれた地域が残っています。(表1-3)

表1-3 天然林のすぐれた区域

地区名	所在地	
八甲田山	青森市 上北郡十和田湖町 南津軽郡平賀町 黒石市	大岳(標高1,585m)を主峰とする八甲田山は、ブナ帯、針葉樹帯、ハイマツ帯と推移する典型的な植物の垂直分布を示し、高山湿原、雪田植生など変化に富む原始的自然が多く残っている。
東虹貝山	南津軽郡碓ヶ関村 南津軽郡大鰐町	スギ・ヒノキアスナロ(ヒバ)・ブナなどが混生する天然林で、スギの天然分布の北限に近い。
西碓ヶ関山	南津軽郡碓ヶ関村	スギにブナが混じる天然林で北限に近い。
作沢川上流域 尾太岳	中津軽郡相馬村 中津軽郡西目屋村	ブナ・ヒバの天然林が広く分布し、ネズコ・コメツガなどが混生している。
暗門川	中津軽郡西目屋村	渓谷はトチ・サワグルミ・イタヤカエデが混生し、その上部はブナ林によって覆われている。高山性・北方系の植物が多い。また、渓谷は典型的なV字谷を形成し、県内随一の大滝「暗門の滝」がある。
岩木山	弘前市 中津軽郡岩木町 西津軽郡鱒ヶ沢町	本県の最高峰(標高1,625m)で、単峰であるため、植物のきれいな垂直分布がみられ、コニーデ型火山の美しい山容と多様な動植物相が見られる。特産種であるミチノクコザクラが自生している。
摩須賀岳 青鹿岳	西津軽郡鱒ヶ沢町 中津軽郡西目屋村	多雪地帯の典型的なブナの原生林に覆われ、地形が険しくV字谷が発達し、露岩地にキタゴヨウ林が生育し、原始的自然が保存されている。
四ツ滝山	北津軽郡市浦村 東津軽郡三厩村	ブナとヒノキアスナロの混じった天然林が広く分布し、貴重な高山性植物が多く生育している。
袴腰岳 大倉岳 赤倉岳	東津軽郡蓬田村 北津軽郡金木町 // 中里町	ブナ林・ダケカンバ林・ミヤマナラ林などに覆われ、風衝草原、高山性植物群落など植生が変化に富む。 動植物相も豊富で、ニホンザルの数群が生息している。

【1976青森県自然環境保全基礎調査報告書】

2) 地区別林相

岩木川流域は、出羽山地の延長にあたる白神山地と烏海火山帯に属する岩木火山地とにより大部分が占められており、これらの山地をとりまく形で台地が分布しています。この地域は地形上、岩木山(1,625m)地区、白神山地地区、目屋地区、大鰐・碓ヶ関地区、奥羽山脈地区、津軽山地地区、屏風山地区に分けられます。

各地区の特徴は、次のとおりです。

① 岩木山地区

出羽山地の延長部を占め、コニーデ型火山の形態を示している岩木山が東北部にあり、低地帯のほとんどは、畑地や放牧地、採草地、または樹園地として利用され、自然植生は認められません。海拔300m以上はブナ林で覆われています。南東斜面のブナ林は伐採され、二次林のミズナラ林が発達しています。

ブナ帯以上は、高山の特色である針葉樹林帯(亜高山帯)は発達せず、ブナ・ダケカンバ・ミヤマハンノキなどの矮小林帯となっていて、ハイマツ帯が続いています。

② 白神山地区

この地区は、青森県の南西部と秋田県の北西部の県境にまたがる約17,000ha（青森県13,000ha、秋田県4,300ha）の日本最大のブナ原生林が分布していることで知られ、ブナ帯に属する沢沿いにはトチ、サワグルミ群落が狭い帯状に長く延びています。場所によってはヒバの純林が形成され、まれにネズコと混交した林も見られます。

ブナ帯から上に針葉樹林帯は見られず、ブナ・ダケカンバ・ミヤマハンノキなどの矮小林帯になっていて、ハイマツ帯に移行しています。

③ 目屋地区

この地区は比較的なだらかな晩壮年期の地形で、標高250m～500mにかけてブナ林やミズナラ林が見られます。ミズナラ林は低地帯にアカマツを伴って、小面積分布しています。標高300m前後の乾燥地には、ヒバ・クロベ（ネズコ）の混交林が見られます。

ブナの純林は、標高600m以上にチシマザサを伴って分布しています。また、陣場岳周辺には、ブナ・ミヤマナラ・ダケカンバ林が見られます。

④ 大鱒・碓ヶ関地区

この地区は、スギ及びヒバの針葉樹林が大部分を占めていますが、特に、秋田地方のスギ天然生林地帯と接続しているのが大きな特徴です。

碓ヶ関西部地帯にはスギ純林が広く分布し、東部地方にはスギ・ヒメコマツ混交林やヒメコマツ純林が小部分見られます。標高200m～300mにはスギの天然林、400m以上の中腹や峰筋にはヒバの純林が形成されており、ネズコ・ヒメコマツは400m前後に生育しています。

学術参考保護林として、また、スギの天然分布の北限として、東虹貝川上流のスギ・ブナ・ヒバの混生林や西碓ヶ関山のスギ林が有名です。



資料「青森県の林業」
昭和63年度版
県林政課

図1-23 森林分布図

⑤ 奥羽山脈地区

標高500m付近までは、スギ・カラマツの人工林やクリ・コナラ・ミズナラなどの二次林で、500～900m付近は、チシマザサ・ブナの群落、900m以上ではコメツガを混生するアオモリトドマツ、さらに1,300m以上はハイマツ地帯となっています。

⑥ 津軽・中山山地地区

この地区には、ヒバ・ブナ・アカマツの天然林がみられます。標高100m～400m付近までは、ブナ・ヒバによって占められ、それ以上はチシマザサを伴うブナ林となっています。山頂部の風衝地はブナ林が消え、少ない面積ながらダケカンバの矮小林やチシマザサ群落が見られます。

また、トチ・サワグルミを代表とする溪畔林は本地区ではあまり発達していないのが特徴的です。アカマツは主として五所川原市前田野目地区の丘陵地に分布しています。



津軽山地とヒバ林

⑦ 屏風山地区

昭和7年から県営事業として始められた砂防植林と藩政時代に植林されたクロマツ林が見られます。また、砂丘地帯にはかつて植栽されたカシワが天然化し広く分布しています。この砂丘の背後には、沼地や湿原が広がっています。しかし、昭和47年から開始された国営屏風山開発事業によって畑地化が進められ、植生に変化が見られるようになりました。

表1-4 県天然記念物

名称及び員数	指定年月日	所在地	所有者及び保護団体
大杉 2本	昭31. 5. 14	弘前市十腰内字猿沢78	巖 鬼 山 神 社
りんごの樹 3本	昭35. 11. 11	西津軽郡柏村桑野木田字千年226	古 坂 卓 雄
イチイ 1本	昭46. 9. 6	北津軽郡板柳町横沢字花岡81	無 量 庵
妙堂崎のモミの木 一本 (トドロッコ)	昭59. 4. 19	北津軽郡鶴田町妙堂崎字掛元12	斎 藤 和 彦
妙経寺のカマの木 1本	昭63. 10. 25	黒石市京町字寺町12	妙 経 寺
燈明杉 1本	平 5. 4. 16	弘前市大沢字堂ヶ平	大 沢 町 会
向外瀬のモクゲンジ 1本 (センダンバノボダイジュ)	平 9. 5. 14	弘前市向外瀬4-10	長 谷 川 謙 一

〔平成10年度 青森県の文化行政 青森県教育庁文化課〕

河川事業の実施にあたって、河川が本来有している生物の良好な生息・生育環境に配慮し、あわせて美しい自然景観を保全あるいは創出する「多自然型川づくり」を推進していきます。

なお、そのための基礎調査として、平成2年から「河川水辺の国勢調査」を行っています。

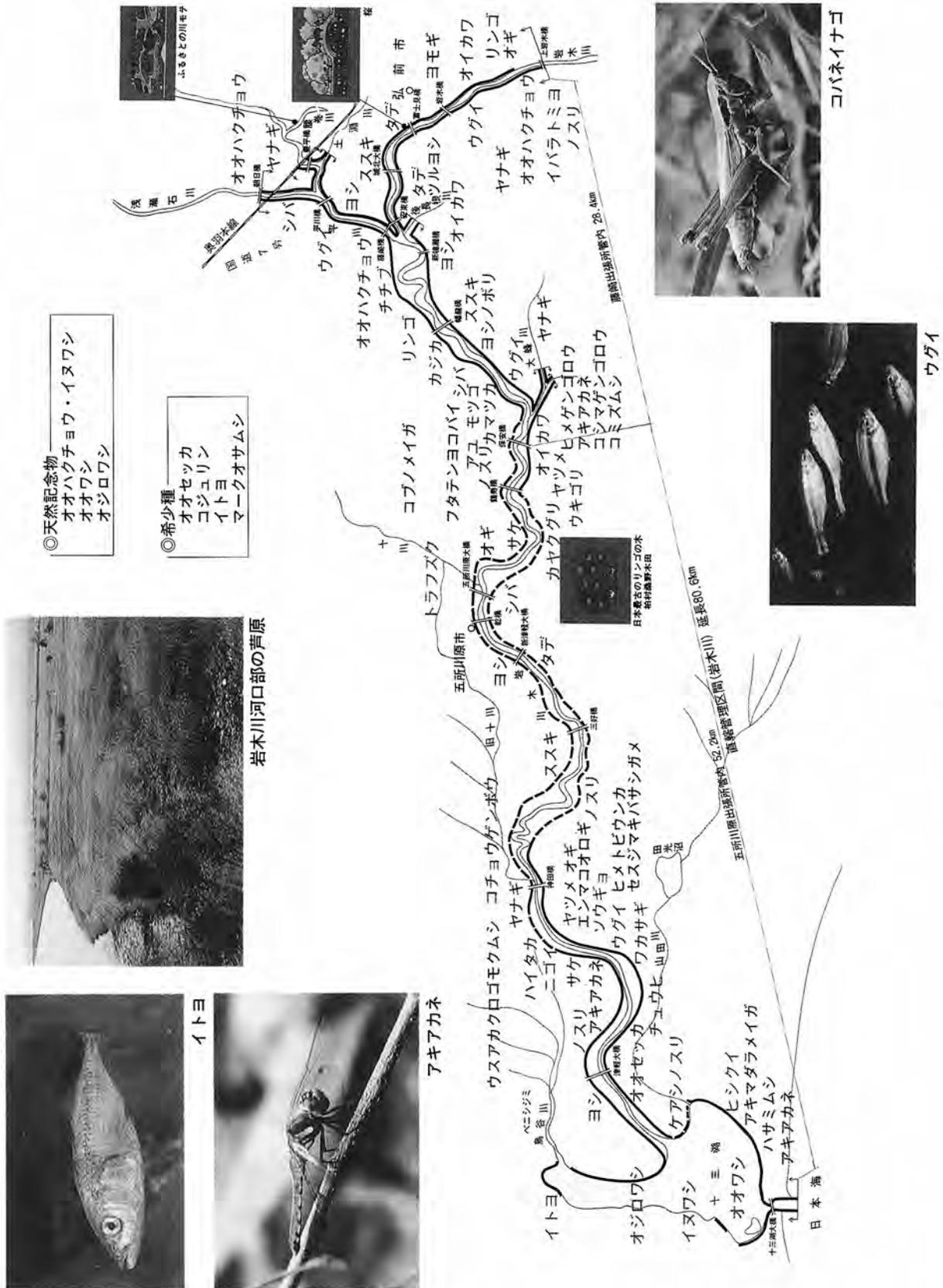


図1-24 植・生物分布図

4 流域の動植物

1) 概要

岩木川流域に生息、自生している動植物の種類と数は、全国的にみて、たいへん豊富であるといわれています。中には南限、あるいは北限とされているものもあります。それは、本州北端で、裏日本海型の湿潤多雪の気候であり、平地面から高山帯までの多様な地形と、大小の河川、池沼、湿原が点在する変化に富んだ自然環境が良好なところであるからです。

また、開発の遅れから上流部白神山地に代表されるブナ原生林や、その他のヒバ林など多くの森林が残されていたことも逆に環境的には幸いした面もあったものと思います。

しかし、近年の各種開発の進展は、動植物の生態系に相当な影響を与えています。中にはすでに絶滅したり、その危機にひんしているものが次第に多くなってきました。

このような状況から、自然環境の保護や、貴重な動植物の採集・捕獲を禁止するため、流域内には、次のとおり自然公園及び鳥獣保護区が指定されています。

① 自然公園

- イ 国立公園 十和田八幡平 (昭和11.2.1指定)
(昭和31.7.10指定)
- ロ 国定公園、津軽 (昭和50.3.31指定)
- ハ 県立公園
 - 大鰐・碓ヶ関温泉郷 (昭和28.6.10指定)
 - 黒石温泉郷 (昭和33.10.14指定)
 - 芦野池沼群 (昭和50.6.17指定)
 - 岩木高原 (昭和50.6.17指定)
 - 赤石溪流・暗門の滝 (昭和56.7.7指定)

② 鳥獣保護区(河川区域)

- 十三湖鳥獣保護区 (昭和56.11.1指定)
- 岩木川河口鳥獣保護区 (//)
- 平川・浅瀬石川鳥獣保護区 (//)
- 岩木川鳥獣保護区 (//)



図1-25 十三湖鳥獣保護区



図1-26 岩木川鳥獣保護区区域図



図1-27 平川・浅瀬石川鳥獣保護区区域図

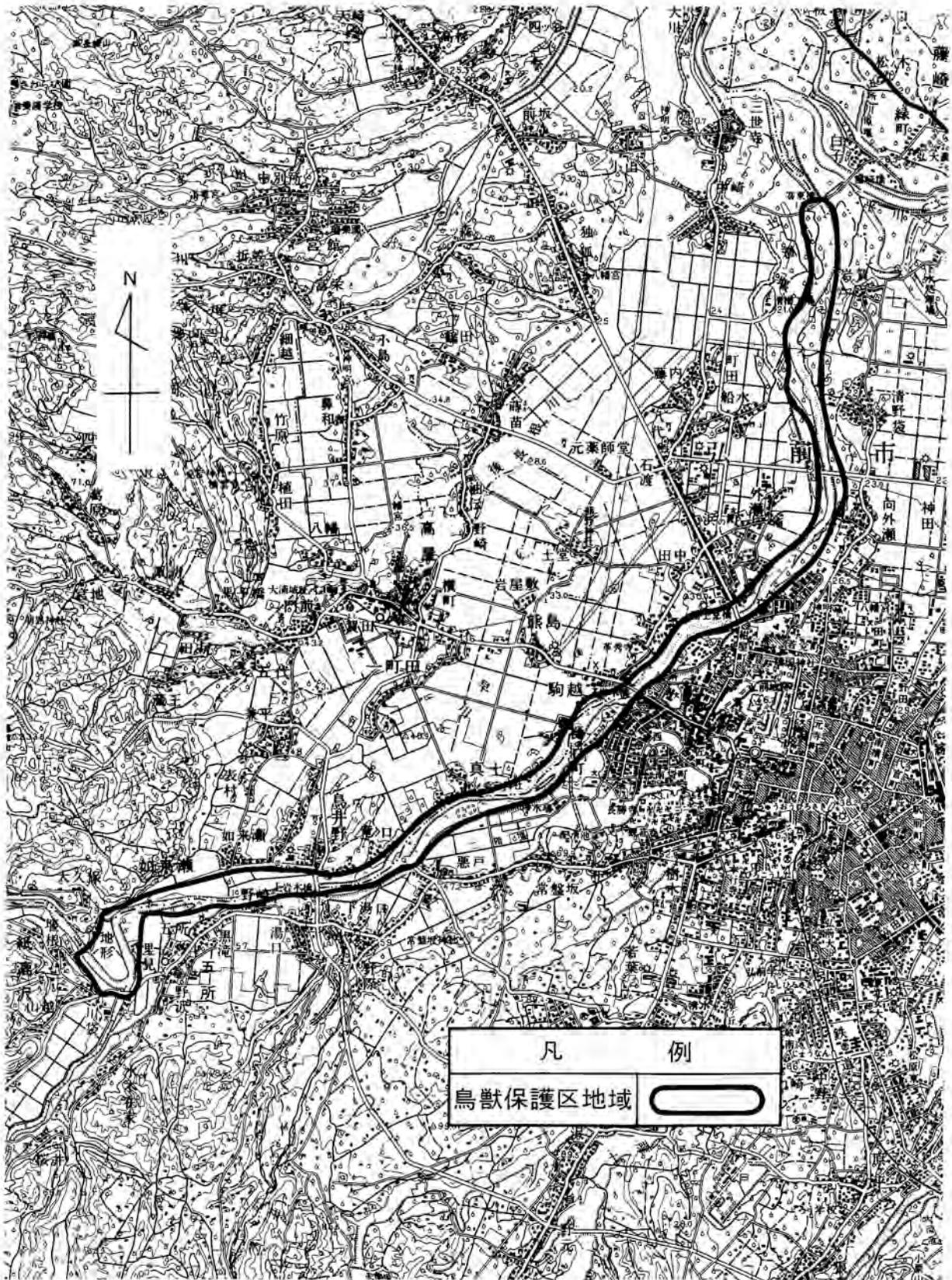


图 1-28 岩木川鳥獸保護区区域图

2) 動物

かつて津軽地方の野山、川には、たくさんの動物が生息していました。まだ稲作が普及していなかった時代の人たちは、これらの獲物で生活していたのです。

狼や熊などの獣が相当いたらしく、度々人里に現われ田畑を荒したり人畜に危害を与えていました。記録によれば、元禄4年(1691)「津軽領内在々狼夥し、人畜に危害加える」。また、『木造町史』には、元禄13年(1700)5月16日の藩日記の記事として「口上の覚、今日昼八ッ時大館村へ熊老つ出で、植田散々荒し、追い散らし候えば人へ喰い懸り、何とも致し様これ無き候ところ、右同様の者金助見当り、たてにて突き留め申し候、右の段御知らせ申し上げ候。以上5月12日」(以下略)と、三上嘉右衛門ほか、3名の連名で、当時の代官でしょうか、大湯五左衛門あて報告したことが書かれています。すなわち、昼に大館村(現森田村)へ熊1頭が現われ、せっかく植付した田を散々荒していたので、これを追い散らそうとしましたが、人に喰いかかり何とも致しようのない有様でした。そこへ金助という猟師が来て、たてをもって突き刺し仕留めたというのです。

元禄16年(1703)「梅田枝村に小熊現われる」。宝永元年(1704)5月「広須新田にて狼荒し候に付き……」、同3年(1706)4月「広須新田の内下古川村にて狼荒し申し由……」、同4年(1707)8月「広須新田下相野村久助子、当年生、今5日の夜狼にとられ申し候由、代官注進これ有り」。(『木造町史』)と、広須新田下相野村(現森田村)の久助という人の今年生まれた子が、5日夜に狼にさらわれたというのです。享保14年(1729)1月16日「津軽藩狼狩7,000人動員」。元文2年(1737)1月「清水森で狼狩り」。明和1年(1764)「冬狼多し人を害す」。五所川原市の狼長根は、山犬が多く人畜に被害を与えるので浪岡の北島氏が山狩りをさせたのが地名になったという説もあります。

このほか狼や熊が出没した記録は多く見られますが、しかし、津軽平野にも時には鶴やトキが飛来していました。人々はしばし農作業の手を休め、その美しい姿に見とれていたかも知れません。中には鶴を生捕りにして藩主へ献上し御褒美をいただいた人もあったといえます。

また、宝暦8年(1758)10月「弘前の南溜池に驚卵鳥(ペリカン)飛来、のどに水1斗が入るフクロ有り」と、変わった鳥も飛来していました。猪、カワウソの生息。今では信じられないことですが、長さ1間半(2.70m)もあるマスが捕獲された記録もあり、津軽半島にも熊が生息していたといわれています。

このように、たくさん生息していた野生動物も次第にその姿を消し、今では前記の狼、鶴、トキ、猪、カワウソなどは、絶滅してしまいました。また、他の種類の中にも、開発や乱獲のため激減しているものもあるといわれています。

流域内の開発は年々進んでいますが、それでも、白神山地のブナ原生林や、各地の池沼、湿原、森林地帯など、まだ自然環境が良好なところでは、各種動物が多く生息しており、この中には、注目されている貴重種も含まれています。

① ホ乳類

(イ) ツキノワグマ

中津軽郡西目屋村・相馬村、南津軽郡大鰐町・碓ヶ間村、西津軽郡鯉ヶ沢町・深浦町・岩崎村など秋田県境近くの山地に多く生息しています。

(ロ) ニホンザル

本県下北半島に住むニホンザルは、世界における野生霊長類の分布北限として有名で、半島頭部の脇野沢村九艘泊は、昭和45年11月に「下北半島のサル及び生息北限地」として天然記念物に指定されています。そのほか、津軽半島北部と中津軽郡西目屋村川原平から西津軽郡岩崎村の十二湖に至る地域、金木町小田川上流から東津軽郡蓬田村にかけての山地にも生息しているといわれています。

今のところこの生息地は比較的良く自然状態が保たれているので、人間の影響を受けていない全くの野生状態にあるとあって良く、その点については、わが国にあって貴重な存在価値を有するものといえます。

(ハ) ニホンカモシカ

山地部に生息していて、国の特別天然記念物指定以来、その数は、増加の傾向にあるといわれています。しかし、森林の伐採、林地建設等は、生息域に変更をもたらし、所によっては農耕地などへの侵入が見られるようになりました。



た。

(ニ) キツネ・タヌキ・アナグマ

キツネ・タヌキ・アナグマは、標高の低い山地や山ろく、低地にも生息していますが、現在ではその数が非常に減少してきています。

それは、殺鼠剤の使用や広葉樹林の伐採が影響しているといわれています。

(ホ) テン

津軽半島と西部山地に生息していますが、大部分はキテンで、数は減少傾向にあります。

(ヘ) イタチ

山地をはじめ山ろくから平野部まで広く生息しています。

(ト) リス

山地や屏風山にも生息し、人家の近くでも見ることがありますが、減少の傾向にあります。

(チ) ヤマネ

昭和50年6月、天念記念物に指定され、津軽半島の山地、白神山地などに少数生息しています。最近では、さらに減少してきています。

(リ) ノウサギ

山地、低山地帯に数多く生息していますが、岩木川原でも見かけることがあります。

(ヌ) その他の主なホ乳類

ネズミ科 (ヤチネズミ・トガリネズミなど)、モグラ科 (ヒメヒミズ・コモグラなど)、リス科 (モモンガ・ムササビなど)、コウモリ科 (カグヤコウモリ・アブラコウモリなど)、イタチ科 (ニホンイイズナ・ホンドオコジョなど) など平地や山地あるいは、岩洞、樹洞に生息しているものですが、モモンガ・ムササビなどは森林の伐採による環境の変化で減少の傾向が非常に強くなっています。



下表は、地域別の各種ホ乳類が生息している場所（生活域区分）についての情報をまとめたものです。

表1-5 流域の各地におけるホ乳類の主要生活域

地域	生活域区分		針葉樹林域	針・広葉樹林域	広葉樹林域	農地・草地 住宅地域	広域
	地域内 の市町村						
中部山地部	平賀町		キツネ ニホンリス	ノウサギ ムササビ	ツキノワグマ ニホンカモシカ アナグマ ホンシュウモモンガ テン	イタチ	タヌキ
	黒石市						
津軽半島部	市浦村		ノウサギ ニホンリス ヤマネ	ニホンカモシカ キツネ タヌキ テン	ニホンザル	イタチ	
	金木町						
	中里町						
西部平地部	森田村		ニホンリス	ニホンカモシカ	アナグマ テン	イタチ	ノウサギ キツネ タヌキ
	車力村						
	稲垣町						
	木造村						
	柏鶴田町						
	板柳町						
西部山地周辺部	常盤崎町						
	藤舎館村						
	田尾上町						
西部山地部	五所川原市		ニホンリス テン	ノウサギ キツネ タヌキ	ツキノワグマ ニホンカモシカ アナグマ ニホンザル	イタチ	
	浪岡町						
	岩木前市						
西部山地部	相馬村		ノウサギ ニホンリス	ニホンカモシカ キツネ テン	ツキノワグマ アナグマ ムササビ ホンシュウモモンガ タヌキ ニホンザル	イタチ	
	西目屋村						
	大碓ヶ関村						

(注) 本表にある動物は、地域内すべての市町村に生息しているものではない。その流域内のある所に生息しているという意味である。

『市町村別鳥獣生息状況調査1989』 青森県自然保護課

② 鳥類

岩木川流域は、高地や低地湖沼など地形的变化に富んでいるため、多くの鳥類が生息あるいは飛来しています。これは、留（漂）鳥と渡り鳥の二つに大別されます。

留鳥は、八甲田山岳地区、岩木山地区、白神山地等の高山に生息する鳥、津軽半島山地等の森林溪谷に生息している鳥、湖沼とその周辺草湿地に生息する鳥に大別されます。

渡り鳥は、冬期間を流域で過ごす冬鳥と春から夏にかけて滞留し、ひなを育てて秋に南方へ去る夏鳥とに区別されます。そのほか、大旅行の途中に短期間滞留する旅鳥もみられます。

(1) 留（漂）鳥

アオゲラ・アオジ・アオバト・ウグイス・ウズラ・オシドリ・キジ・クマガラ・ワシなどで、田代平のオオワシ、白神山地のクマガラ・イヌワシ・ブッポウソウやクマタカ・コノハズク・ヤマセミ、岩木川下流のオオセッカ等が知

られています。

(ロ) 渡り鳥 (夏鳥)

オオルリ・カワセミ・キビタキ・シラサギ・ツバメ・ホトトギス・ヨシキリ・ヨタカなどが水辺、湖沼、山地に飛来します。

(ハ) 渡り鳥 (冬鳥)

オオハクチョウ・イスカ・キレンジャク・コクガン・ツグミ・マガモ・マヒワ・カイツブリなどが湖沼、林などでみられます。十三湖・平川のオオハクチョウは有名です。

(ニ) 旅鳥

ウズラシギ・クサシギ・ツルシギ・ヒバリシギなどが水辺、湖沼、湿地に渡来します。

地域別の状況を見ますと、西目屋村、岩木町、平賀町、黒石市など山地の多い所、弘前市のように寺社林の多い所、五所川原市・金木町・中里町・市浦村など津軽山地から西へ平野が広がり、大小の河川、湖沼がある所ではその数も多く見られます。また、鶴田町や木造町、車力村など、大きなため池や草原、湿地が広がっている所では、渡り鳥の休息地となったり、湿原性鳥類などの繁殖地となっています。

調査によると、藤崎町の平川河川敷と、金木川下流岩木川合流点付近のヤナギ原は、ゴイサギの集団繁殖地が確認されており、この地の計画的な保全が望まれています(『市町村別鳥獣生息状況調査報告書』1989、青森県自然保護課)

かつて津軽地方の山野には、もっと多くの鳥が生息し、春先から晩秋にかけては各種の渡り鳥が飛び交いまさに鳥たちの楽園でありました。しかし、環境の変化に伴って、今ではその数も減少し、尾上町猿賀神社のウ、ゴイサギ、アオサギの営巣地のようにその姿が見られなくなったものもあります。

流域における鳥獣で天然記念物に指定されているものは、次のとおりです。

流域内鳥獣関係天然記念物

表1-6 (国 指 定)

名 称	所在地又は主な生息地	指定年月日	備 考
カモシカ	県下一円(全国)	昭和9年5月1日	特別天然記念物指定 (S30.2.15)
イヌワシ	県下一円(全国)	昭和40年5月12日	
クマガエラ	〃	〃	
オジロワシ	〃	昭和45年1月23日	
オオワシ	〃	〃	
コクガン	〃	昭和46年5月19日	
マガン	〃	昭和46年6月28日	
ヒシクイ	〃	〃	
ヤマネ	〃	昭和50年6月26日	

表1-7 (県 指 定)

名 称	所在地又は主な生息地	指定年月日	備 考
十三湖のオオハクチョウ	北津軽郡市浦村	昭和35年3月26日	
藤崎のハクチョウ	南津軽郡藤崎町	昭和51年6月26日	

【第3回自然環境保全基礎調査 河川調査報告書1987】 環境庁

③ 魚類

昔の岩木川流域の各河川は、魚類が豊富で沿岸住民の中には漁猟を生業とした人も多くいました。とくに、秋のはじめから晩秋にかけてのサケ・マス漁は岩木川の風物詩の一つでもありました。

大物もいたらしく、長さ1間半、あるいは9尺（いずれも2.70m）など信じられない大物が獲れていたことが記録にあります。また、魚にまつわるいくつかの伝説もあります。その中の一つに、津軽に流罪になった、花山院少将忠長卿が大変釣りが好きで、いつも浅瀬石川などへ釣りに行きました。川に魚が少なくなると鮑くずや笹の葉などに望む魚の名を書いて流しました。するとその通りの魚が上ってきたという。この人の最も好んだ魚は、浅瀬石川のサケで、この川のサケの背中に歯型があるのは、花山院が足駄でサケの上を渡ったその跡であるといわれています。

川にサケがそ上する最盛期には、「その群に棹をさしても倒れない」ほどそ上するという伝えもありますから流域の各河川にも相当なサケが上っていたものと想像されます。

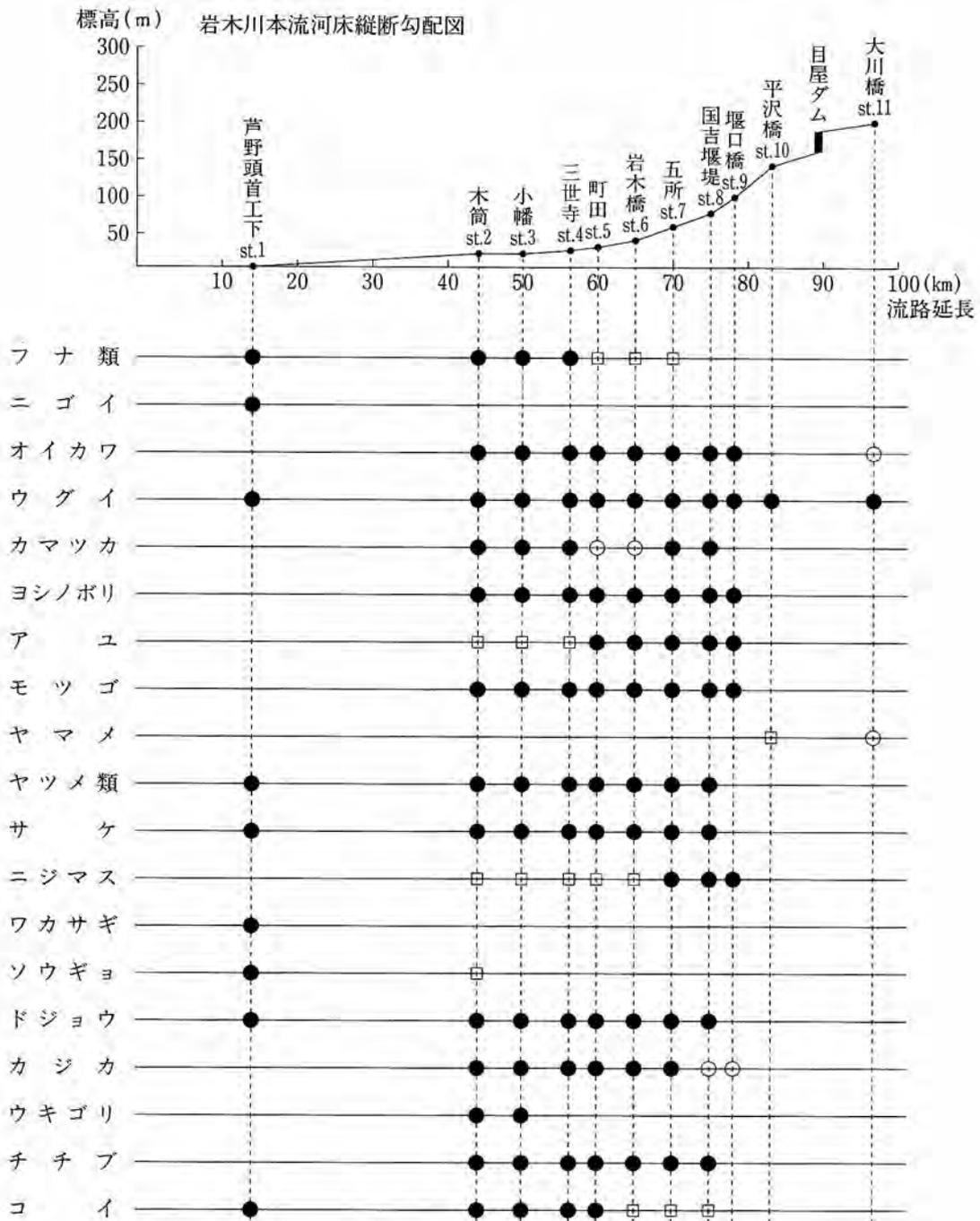
昭和32年（1957）の調査結果では、46種が確認されています。現在でもそれに近い魚種が生息しています。主なものとしては、フナ類、ナマズ、ヤツメ類、ドジョウ、サケ、ウグイ、カジカなどですが、移入種であるソウギヨハクレンなども多くなっているといわれています。

1987年度環境庁が実施した岩木川の魚類調査結果（調査区内94.8km調査地点11ヶ所）によると、本来は生息していないオイカワ、モツゴなどが定着し、また、下流域ではカルムチーの繁殖が見られたとしています（図1—30）。

国吉堰堤、統合頭首工、上水道取水堰の各取水堰では、夏期の一時期に流下する水量が全くないこともあり、魚類の生息には大きな影響を与えるものですが、それにもかかわらず、今回調査地の町田及び堰口橋でカジカが採捕されたことは、河川環境が向上している結果としています。



図1—29 岩木川調査地点図



○印等は、魚獲試験及び漁協等からの聞きとりにより調査地点において生息が確認されたものを示す。

- 凡例
- 今回調査で確認
 - 前回及び今回調査で確認
 - 前回調査で確認

第3回自然環境保全基礎調査
河川調査報告書 1987 環境庁

図1-30 岩木川魚類調査結果

④ 両生類

トウホクサンショウウオ・クロサンショウウオ・ハコネサンショウウオ・イモリ・ヒキガエル・ヤマアカガエル・タコガエル・アマガエル・トノサマガエル・ツチガエル・モリアオガエル・カジカガエルなど多くの種類が生息しています。

ハコネサンショウウオは、山ろくの沢に多く、岩木山地区標高1,500m程の大鳴沢の源流部や1,100m程の大岩などで成体が確認されています。

クロサンショウウオは、十二湖・西目屋村・相馬村などに生息していますが、大鰐町十和田山の湧水池は、八甲田山鏡沼とともに全国的に知られた大生息地です。これまでは稲作の豊凶を占うご神体として土地の人の手厚い保護を受けてきましたが、その慣習もすたれた現在、自然保護、野生動物保護の観点から新たな対策が必要です。

モリアオガエルは、南八甲田山ろく部に広がる大小の湿原がその主要な生息場所です。ほかに、群生地として十二湖があげられますが、岩木山ろく黒坊沼、大鰐町十和田山などにもかなり多く生息しています。これらの地区を中心に、特に水系の保護保全が必要です。

カジカガエルは、浅瀬石川の本、支流に多く、青森県内随一の生息地です。特に、初夏のころから幼生の生息場所となる河川水の汚染を極力防止することが大切です。また、平川水系にも多く生息しています。

タゴガエルは、弘前南西地区の山地帯に極めて広く分布しています。生息地の森林伐採などによる水の枯渇、水温の上昇などを防ぐ必要があります。

⑤ ハ虫類

ハ虫類は、トカゲとカナヘビ及びヘビ類で、その種類はわずかです。マムシ・シマヘビ・アオダイショウ・ヤマカガシ・ジムグリ・クサガメ・イシガメなどは各地の原野部に多く生息しています。

⑥ 甲殻類

青荷川のサワガニ、沖浦のザリガニ、平賀町のアメリカザリガニが知られていましたが現在では、平野部全域に生息しています。また、ヌマエビなどもみられます。

⑦ 蝶類

本県に生息しているといわれる108種のほとんどが生息しています。代表的なものには、ヒメギフチョウ・ウスバシロチョウ・モンシロチョウ・キタテハ・カラスアゲハ・オオムラサキやウラクロシジミ・エゾミドリシジミなどの森林性の種類であるシジミチョウ類が多くいます。

ヒメギフチョウは、大鰐町折紙から早瀬野にかけての低山地に生息しています。局所的に分布するので、かなり積極的な対策が望まれています。

オオムラサキは、黒石地区・西部の笹内川最下流部、大間越等で知られていますが、食樹であるエゾエノキの伐採を見合わせることで保護の第一歩です。

そのほかには、弘前市内のカラスシジミ、オオルリシジミ、座頭石付近のウラクロシジミ、久渡寺付近のアオバセセリとスミナガシ、大鰐町のウスイロコノマチョウが知られています。

⑧ その他昆虫類

地球に住む動物のうち、8割が昆虫であるといわれますが、この流域にも多くの種類が生息しています。その代表的なものはトンボ類（ルリイトンボ・ムカシトンボ・オニヤンマなど）、セミ類（ニイニイゼミ・エゾハルゼミ・ヒグラシ・アブラゼミ・エゾゼミなど）、ホタル類（ハイケボタル・ゲンジボタル）などであります。また、クワガタ類、カミキリ類など山地性の昆虫も多く生息しています。

森林の伐採が進んでいる地域では、昆虫の種類と数が減少する傾向にあります。また、樹園地や水田耕作の地帯では、農薬散布の影響を受けて激減しています。

ムカシトンボは、岩木山ろくカベクラ沢、市浦村相内川上流、黒石温泉郷などに生息しています。

メススジゲンゴロウは、大鰐町十和田山の湧水池が全国的に知られた生息地です。現状では入山者も少なく、比較的良好な環境下にあります。周辺天然林の伐採が進むと、水質、水温の変化をもたらす絶滅の可能性さえあります。乱獲防止の対策も必要です。

3) 植物

本地域は、低地から高山帯まで極めて変化に富んだ植生が見られます。

亜高山帯及び高山帯の自然がそのまま残されている所では、貴重な群落もたくさんあります。また、日本海側の屏風山地区に発達している砂丘の背後には湿原や沼地が形成され、湿原植物群落や水生植物群落がみられますが、開発



や乱獲によって激減している植物も少なくありません。

青森県の植物が研究され、新種として記録された植物も多く、それらの学名や和名に、青森県を印象づける名前がつけられているアオモリマンテマ・ミチノクコザクラ（イワキコザクラ）・ツガルミセバヤなどがあります。また、青森県を南限、北限とする植物も多くあります。

次に、岩木川流域の植物相を岩木山を中心とする山地、津軽半島の脊梁をなす津軽山地、流域の平野部、それに湿原をかかえる屏風山の四つの地域に大別して植相をのべると次のように区分することができます。

① 岩木山・白神山地区

この山地は、連続性のある山脈と険しい谷が入り交じり、きわめて複雑な地形を成しています。それに、常時日本海側から湿度の高い風が吹きつけるため、植物の繁茂も著しく、広大なブナの原生林やミズナラの天然林とチシマザサがいたる所に分布していますが、亜高山帯を象徴するアオモリトドマツの針葉樹林帯は見られません。



主な植物としては、リシリシノブ・タケシマラン・ミツバオウレン・ミヤマキンバイ・コケモモ・キバナシャクナゲ・ユキワリコザクラ・ウスユキソウ・チシマフウロなどで、その他高山性植物が数多く生育しており、その中でも白神岳周辺で発見されたアオモリマンテマは有名です。

岩木山は、まわりに高い山がなく、季節風をまともに受けるため標高の低い割に高山性の植物相を示していますが、造山の歴史が浅いためか、その種類は少ないようです。

標高400~1,000mにかけては、ミヤマハンノキ・キバナシャクナゲなどが、さらに上部にはハイマツがみられ、山頂付近にはコケモモ・ガンコウラン・イワウメなどが生えています。また、中腹にはゴゼンタチバナ・ベニバナイチゴ・ウスバスマイレや紅紫色のハクサンチドリ、特産種として有名なミチノクコザクラが生育しています。

② 津軽山地地区

この地域はブナ帯に所属し、一帯にブナが分布しています。部分的にはヒバが混生していますが、ふもとに近づくにつれて、アカマツ林とカシワ林が多くなってきます。ヒバ林には、ヒメホテイラン・イチヨウラン・ミヤマウズラなどのラン科の植物が多く自生しています。また、中腹あたりからふもとにかけての雑木林に囲まれた谷間では、いたる所にミズバショウの群落がみられ、数は少ないけれどもエゾノリュウキンカも混生しています。ふもとには、クマガイソウ・ギンラン・クルマユリなどたくさんの種類の山草がみられます。

③ 津軽平野地区

平野部の多くは水田で、弘前市から五所川原市にいたる岩木川の堤防沿いはリンゴ園となっていますが、川や水路のまわりには、ヨシ・ススキ・ヨモギなどが生えています。河川敷にはこれらが群生し、河岸はカワヤナギが生え、河口まで続いています。一部には群生している所もみられます。

五所川原市郊外のホロムイイチゴ、板柳町の一部で見られるシロバナタンポポなどは貴重なものとされています。

④ 屏風山地区

木造町から車力村にかけての屏風山一帯は広く砂丘地帯で、砂丘間には大小の池沼が点在し、湿原植物群落、水生植物群落がみられます。

海岸の砂丘地帯には、ハマナス・ツルウメモドキなどの低木とクロマツ・カシワの植林が南北に続いています。また、海浜にはハマゴウ・ハマニンニク・コウボウムギ・シロヨモギ・ハマヒルガオ等の海浜植物群落が形成されています。背後の湖沼湿原には、マコモ・ヨシ・ススキ・ヨモギなどが密生しており、ミズゴケも繁茂しています。特に、車力地区の湿原は、高層湿原として学術的には貴重なものとされています。

ここには、ノハナショウブ・ニッコウキスゲの大群落のほか、ツルコケモモ・トキソウ・サワラン・ミカツキグサ・モウセンゴケ・サワギキョウ・カキラン・コアニチドリ・ミズチドリなどの湿地性植物が自生しています。また、屏風山防風林のなかには、ミズバショウ・クルマユリ・エゾスカシユリ・イチャクソウ・エビネなども多く見られます。



屏風山湿原のニッコウキスゲの群落



タコノアシ (昭和47年中里町若宮で撮影)



ホロムイイチゴ 『79市勢要覧』五所川原市

⑤ 北限・南限の植物

青森県を北限、または南限とする植物は多くありますが、流域内では、大鰐町虹貝川上流のスギの天然林は極めて北限に近く、また、八甲田山地のアオモリトドマツ、岩木山のコメツガなども北限とされています。また、南限種には、八甲田山地のヒメワタスゲなどがあります。一方、「タコノアシ」は湿原の開発・開田などによって著しく減少し、環境庁(1997)のレッドデータカテゴリーでは絶滅危惧Ⅱ類にランク付けられています。

4) 学術上の貴重な生物群集及び所在地

流域内の学術上貴重な生物群集及び生物の所在地は次のとおりです。

① 八甲田山地区

八甲田山系櫛ヶ峰を主峰とする南八甲田は、本州最北の高山地帯で、ブナ帯、針葉樹林帯、ハイマツ帯と推移する典型的な垂直分布を示す地帯となっています。特に、高層湿原と雪田植生に特徴が認められます。雪田草原の代表的な植物として、ヒナザクラ・イワイチョウ・チングルマ・ウメバチソウ・ミズバショウなどがあげられます。

② 屏風山砂丘地帯

屏風山砂丘上にはかなり広くカシワの純林が見られます。これは、かつて植栽されたものと思われていますが、現在はまったく天然化しています。また、砂丘の低湿地には、ワタスゲ・ムジナスゲ・ノハナショウブ・タチギボウシのほか、クロバナロウゲ・ヤナギトラノオ・ミツガシワ・ミズバショウなどの亜寒帯湿原植物があり、所によってはミズゴケ・ツルコケモモの高層湿原となっています。この地区は伐採・開墾が進み、また、乱獲によって湿原が荒らされてきています。

③ 碓ヶ関地区(学術参考保護林)

東虹貝川の上流の約33haの面積を占め、スギ・ヒバ・ブナなどが混生し、スギの天然分布の北限があります。また、西碓ヶ関山のスギの天然林も、約21haの面積をもち、北限に近い天然林です。

④ 津軽半島地区

津軽半島内部の高地には、ヒバ林からブナ林に至る森林が自然状態を保ち、餌付けなどのされないサルが自然のままに生息しています。また、一部にはザリガニ・ヤマドリが生息地があります。

⑤ 長橋溜池地区(五所川原市)

梵珠山ろくの長橋溜池に、日本最小のハッコウトンボが生息しています。

⑥ 青荷溪谷地区(黒石市)

青荷温泉付近の溪谷地帯は、ムカシトンボをはじめ各種昆虫の生息地です。ムカシトンボは、極めて狭い範囲に、

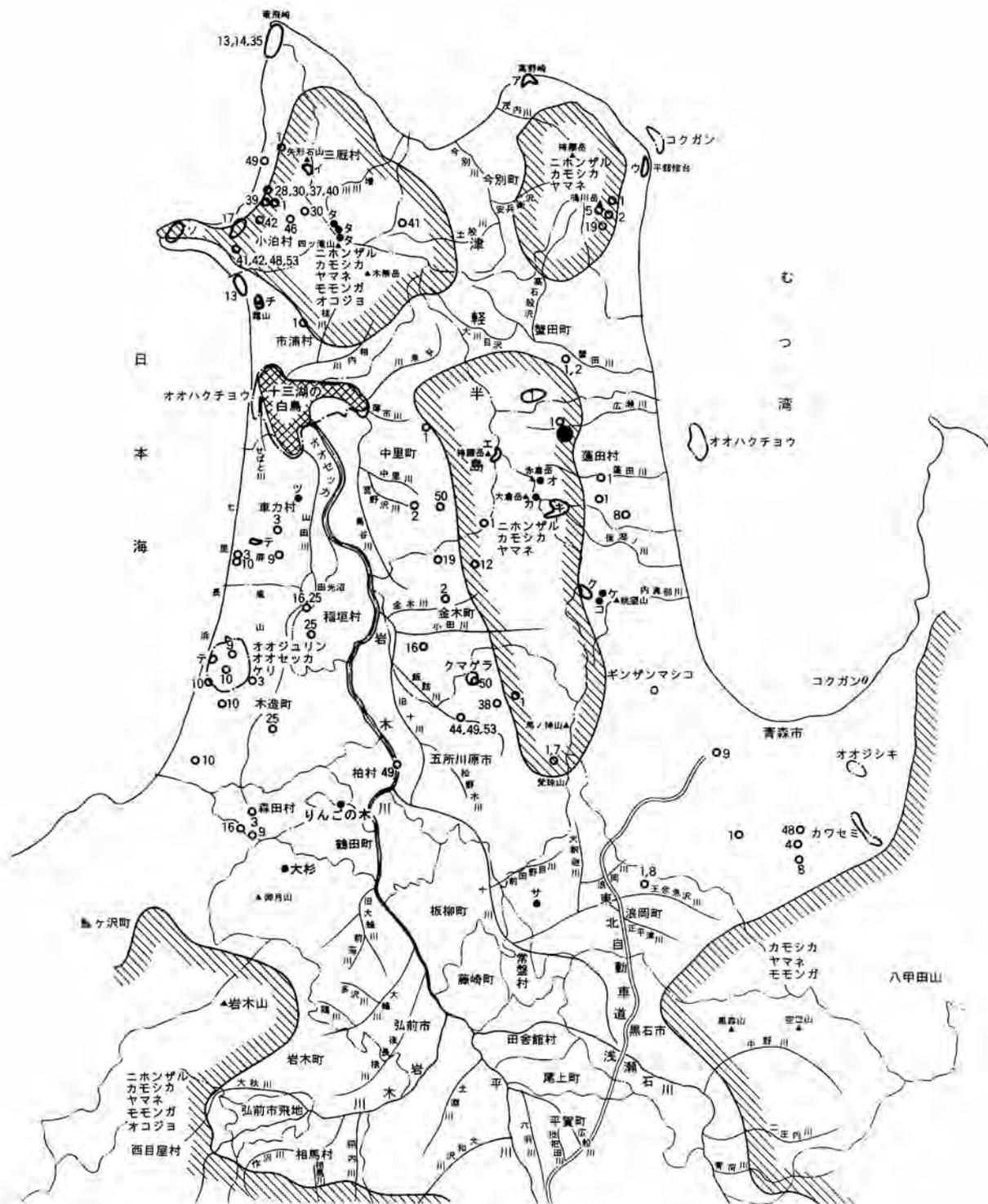


図1-32 重要生物分布図(1/3)

番号	件名	名称
ア	高野崎の海産植物群落	
イ	矢形石山の風産地植物群落	
ウ	平船のクロマツ林	
エ	袴腰岳の風産地植物群落	
オ	赤倉岳のミヤマナラ群落	
カ	大倉岳のダケカンバ林	
キ	後島山ヒバ林	
ク	内真徳山ヒバ林	
ケ	眺望山のヒノキ林	
コ	眺望山のカラマツ林	
サ	熊沢湖池のエゾノミスズナ	
シ	西壁ヶ間スギ天然林	
ス	早瀬野のスギ・ヒバ天然林	
セ	栗虹貝山スギ・ブナ天然林	
ソ	龍現崎のブナ林	
タ	四ッ滝山のオサババクサ	
チ	霧山のカシワ林	
ツ	車カのクロマツ林	
テ	磨風山の足取	
ト	岩木山高山植物群落	
ナ	尾太岳のコマツガ林	
ニ	大戸瀬海岸植物群落	
ヌ	土倉山スギ天然林	
ネ	然ヶ岳のヤチダモ林	
ノ	赤石川のブナ林	
ハ	白神岳高山植物群落	
ヒ	白神岳のオスコーヒバ	
フ	駒作のヤブツバキ林	
ヘ	タブノキ自生北限地	
ホ	松神のヤマアイヒカラズサンショウ	
マ	木蓮寺のモクゲンジ	



図1-32 重要生物分布図 (2/3)

番号	種名	昆虫類対照表
1	ムカシトンボ	
2	ムカシヤンマ	
3	ハチチヨウトンボ	
4	ガロアムシ目	
5	タガメ	
6	ヒメアブチヨウ	
7	オオムラサキ	
8	カサネイトトンボ	
9	オオセウスイイトトンボ	
10	チヨウトンボ	
11	クロスジヤンマ	
12	カバヒロシジミ	
13	ゴマシジミ電線型種	
14	オオトルシジミ	
15	マクオオサムシ	
16	ニトキヤンマチハチ	
17	シモヤンマチハチ	
18	メススジヤンマ	
19	アオハセリ	
20	スミヤカシ	
21	オオゴマシジミ	
22	ミカドシジミ	
23	シモヤンマチハチモトキ	
24	エリアカオオサムシ	
25	ヒメクロオサムシ	
26	ミヤマダイコクコガネ	
27	オオキキイロハナムグリ	
28	アサギマトラカミキリ	
29	トウキョウトラカミキリ	
30	カクムネムツホシダマシ	
31	チビヒサゴメツキ	
32	カクムネムツホシダマシ	
33	オオツヤバネハニボタル	
34	ワカトルホシダマシ	
35	オオアサギマトラカミキリ	
36	オオアサギマトラカミキリ	
37	オオアサギマトラカミキリ	
38	シモヤンマチハチ	
39	オオアサギマトラカミキリ	
40	エンマハバヒロコガネ	
41	ヒメボタル	
42	セコアサギマトラカミキリ	
43	ハマスズ	
44	クロヒバリエトキ	
45	エリエンマコガネ	
46	マエグロハチチヨウ	
47	オオキヤンマ	
48	オオムラサキ	
49	オオムラサキ	
50	ニトキヤンマ	
51	トウキョウ	
52	トウキョウ	
53	シモヤンマチハチ	
54	オオセウスイ	

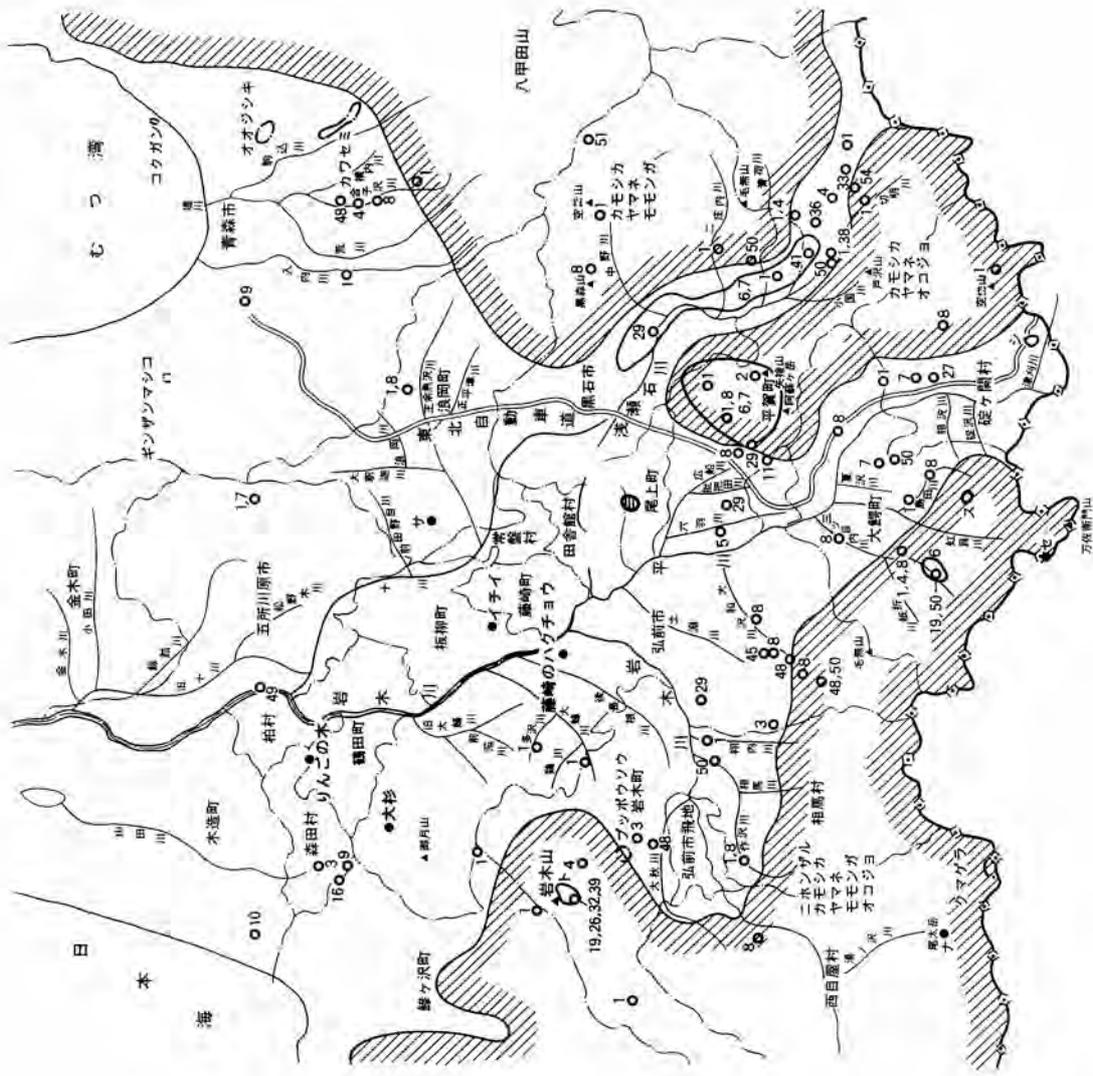


図 1—32 重要生物分布図 (3 / 3)

しかも温泉旅館のすぐ近くに生息地があるので、絶滅が心配されています。

⑦ 黒石地区

沖浦や摺毛の溪谷地帯にサワガニが生息しています。ここは、鱒ヶ沢町や深浦町の生息地とともに世界における淡水カニ類分布の北限地として知られていますが、近年津軽半島にも生息が確認されています。

⑧ 岩木山地区

登山道沿道と標高800m以上の植物帯で、ブナ林とミネカエデ・ナナカマドなどに、わずかながらコメツガを含む亜高山低木帯と、さらに上部には、ハイマツ・ハクサンシャクナゲなどの高山低木帯があります。雪渓には、ミチノクコザクラの多い湿地花畑があります。

⑨ 碓ヶ関地区

町の近くや久吉温泉付近の溪谷沿いにザリガニの生息地があります。秋田県大館のザリガニは死滅したといわれているので、碓ヶ関付近が日本海側の分布南限地と考えられます。

⑩ 貴船神社池塘寒地動物生息地

大鰐町十和田山の貴船神社にある小池塘（標高約500m）に、寒地系動物のクロサンショウウオ・メススジゲンゴロウ・キイロマツモムシなどが生息しています。

5) その他、特記すべき生物

そのほかに、特記すべき生物としては、次のものがあげられます。

① ホ乳類

キツネは岩木山のふもとや津軽山地に生息していますが、殺鼠剤の使用などにより所によっては現在絶滅が確認されています。ホンシュウモモンガ・ホンドオコジョは、八甲田山地に生息しています。

② 両生類

金木町喜良市、浪岡町梵珠山の溪流には、カジカガエルが生息しています。また、浪岡町梵珠山水無川には、ハコネサンショウウオが生育しています。金木町喜良市及び飯詰山には、クロサンショウウオが生息しています。

③ 鳥類

屏風山と岩木川河口付近や廻堰大溜池付近は、オオセッカ・コジュリンの繁殖地となっています。また、廻堰大溜池には、ヒシクイやカモ類が渡来しています。

岩木山地区には、コノハズク・ホシガラス・イワツバメ・クマタカ・イヌワシなどが飛来し、白神山地のクマタカ・コノハズクも知られています。

尾上町の猿賀は、ウ及びサギの繁殖地として以前は知られていましたが、昭和43年を最後にその姿が見られなくなりました。

④ 稀産植物

五所川原市長富二の沢ため池のホロムイイチゴは、稀産種として知られています。



サワガニ



オオセッカ



イヌワシ



クマゲラ

— 参考文献 —

<1 流域の概要>

- 1) 経済開発要覧 1987・1988・1989 (青森県企画部)
- 2) 昭和61年～平成元年度版県勢要覧「青森県の姿」 (青森県統計協会)
- 3) 新津軽地域広域市町村圏計画 (津軽地域広域市町村圏協議会 昭和55年)
- 4) 第5次青森県長期総合計画 昭和62年1月
- 5) みえてきた青森(統計で知る県勢89) (青森県統計協会 平成元年3月)
- 6) 河川総覧各論(岩木川水系) (東北地方建設局 昭和33年)
- 7) 東北の河川 (東北地方建設局 昭和62年)
- 8) 津軽の母(岩木川改修50周年記念) (青森工事事務所)
- 9) 第34・35次青森農林水産統計年報
(東北農政局青森統計情報事務所編集 青森県統計協会 昭和61年～)
- 10) 青森県観光要覧 (青森県 昭和59年)
- 11) 東北の道路と交通「青森県の道路と交通」 (青森工事事務所 青森県土木部 昭和58年)
- 12) あすなる百年 (青森銀行 昭和59年4月)

<2 地形と地質・気象>

- 1) 青森県災害異誌(追録昭和33年～37年) (青森県気象対策連合会 昭和38年)
- 2) 青森県気象災害誌(昭和31年～52年) (青森地方気象台 昭和53年)
- 3) 青森県自然環境保全基礎調査報告書 (青森県 1976)
- 4) 第3回自然環境保全基礎調査・河川調査報告書 (環境庁 1987)
- 5) 青森県の気象と農業 (青森県農林部 昭和61年)

<3 林相と植生>

- 1) ブナ林を守る (白神山地のブナ原生林を守る会・鳥海山の自然を守る会共編 秋田書房)
- 2) 昭和59年度環境庁委託業務報告書「青森・津軽地域環境利用ガイド」 (青森県 昭和60年)
- 3) 青森県の林業 (昭和63年度版 青森県林政課)
- 4) 青森県植物誌 (中沢潤編 東奥日報社 昭和50年)

<4 流域の動植物>

- 1) 市町村別鳥獣生息状況調査報告書 (青森県自然保護課 1989)
- 2) 青森県の鳥獣 (青森県 昭和53年)
- 3) 青森県動物誌 (佐藤光雄著 東奥日報社 昭和50年)
- 4) レッドデータブックカテゴリー (環境庁 1997)